

Wasteful grace is moderate and bring up environment and a human being

もったいない・おかげさま・ほどほどに、が環境と人間を育てる

# M・H通信

M·O·H communication

**特集：九州** — 持続可能な社会へのFLY  
「行政・企業・市民の環境意識を探る」

18号

2007  
Winter

目次

特集「九州・持続可能な社会へのFLY」

M・O・Hレポート1 環境技術が社会に普及するまで

プラスチック再生の明日 白井 義人……5

M・O・Hレポート2

九州グリーンツーリズムのキーパーソンに会いに行こう!

養父 信夫……13

M・O・Hレポート3

命と土と愛に感謝。『もったいない食堂』でいただきます。

長谷川 貴士……22

M・O・Hレポート4

堆肥でつながる「コミュニティ」 波多野 信子・たいら 由以子……29

M・O・Hレポート5

火の国・熊本、持続可能な大地へのエピソード

藤本 正浩・吉田一浩・松尾 久則……36

M・O・H対談「働く人」と「地域」が主役に

持続可能な社会にマッチングする企業とは――

大槻 眞一&森建司……41

M・O・Hレポート6

持続可能な社会2種「どちらを選ぶ?」 内藤 正明……47



八幡鉄工所あとのスペースワールドから望む夕景

ショート・ショート

ふれあい 第八回『みんなちがってみんないい』 中井二三雄……62

環境経済論てほれ話

隣のお庭の「循環型経済」 花田真理子……63

くつきぎの森——ユースレター

「秋の夜長を楽しむタベ」開催しました。 ……67

〈商家の家訓の話 第四回〉

矢尾喜兵衛の所感(二) 末永國紀……73

「人間の学」(森信三先生著)を読む 井上昌幸……75

「日野町で思ったこと」 今関信子……79

風呂敷七変化 畑裕子……81

MOHECOTOURISM<sup>7</sup>

屋久島エコアイランドへの道 檀上俊雄……83

本の紹介 ……86

落ち葉 三山 元暎……87

読者からのお便り・MOH読者川柳 ……88

「やまのこ」事業で森林体験(漫画) オノミユキ……89

講演日記 ……91

MOHニュース ……92

MOH通信概要 ……93

お知らせ ……94

# 九



## ■特集:九州 — 持続可能な社会へのFLY

・九州グリーンツーリズムの  
キーパーソンに  
会いに行こう — P13

・プラスチック  
再生の明日 — P5

・堆肥でつながる  
コミュニティ — P29

北九州市

福岡市 ● 福岡県

佐賀県

大分県

長崎県

熊本県

熊本市 ●


宮崎県

・火の国・熊本、  
持続可能な大地への  
エピソード — P36

・命と土と愛に感謝。  
「もったいない食堂」  
でいただきます — P22

鹿児島県

# 九州



私は、循環型社会と持続可能社会の狭間でゆれていた。琵琶湖を抱える滋賀県は環境先進県といわれ、グリーン購入や菜の花エコプロジェクトは全国を巻き込む環境活動になっている。しかし取材を進めるに従い疑問が膨らんだ。産官学民が一体となって、新しい社会や産業を作り出そうとしているのか？共通するモデル像はあるのか？

そんな時、一冊の本と出会った。「北九州エコタウンを見に行く。循環型産業都市モデル」（ダイヤモンド社刊）。著者は循環型社会のジャーナリスト高杉晋吾氏。ジャーナリスト矢倉久泰氏からの紹介だった。

九州は、有機水銀による水俣病や有明海のダムによる環境破壊、北九州の粉塵公害等により、環境と健康

と産業に大きな痛手を受けてきた。そして産官学民が一体となり“命がけ”で危機を脱した。

北九州市の末吉興一市長はいう「『七色の煙』の時代があつてこれではならないうと、一略—二十世紀の産業革命で大量に安く工業製品を作ってきたが、二つの忘れ物をした『生産の後始末の技術』『地球的センスで可能なかぎりの省エネ技術』だ。このままでは二十一世紀を永続する産業であり続ける事はできない。環境産業・リサイクル産業、循環型産業が大きな意義を持つ」（同著より抜粋一九九九年）。

二〇〇七年、九州特集を企画した。産官学民の現状を拾い、複数の地域を対象とした。取材当日、北九州の空は、青く澄んでいた。

（つむらここみ）



## 白井 義人

九州工業大学 教授

news report |

Tomorrow of the plastic reproduction

## 環境技術が 社会に普及するまで

生ごみからプラスチックをつくる。まるで夢のようなニュースが伝えられたのは、今から数年前(2004年頃)のこと。その技術を開発した九州工業大学の白井義人先生が、現在取り組んでいるのは、生ごみからできるプラスチックを一つの媒体とした、地域の活性化と地域連携の実践型研究です。同大学の白井研究室を訪ね、画期的な環境技術が社会に普及するまで、直面する現実問題と、受け皿となる社会システム構築の必要性について、お話をうかがいました。

■北九州市若松区ひびきの／九州工業大学

■2007年10月

# 再生の明日 プラスチック

M.O.Hレポート  
〈九州・持続可能な社会へのFLY―北九州エネルギー〉



## 生ごみから生成した プラスチック — その長所と短所とは？

「生ごみからつくるプラスチックは、ポリ乳酸という物質が主役になります。ポリ乳酸をつくるには、例えば澱粉を分解してブドウ糖をつくり、それに乳酸菌を入れて乳酸発酵させ、乳酸菌を取り除いた後の発酵液を濃縮して、その後蒸留精製します。そのためには、ブタノールを入れてエステルをつくり云々と、聞いてもさっぱりわからないでしょ(笑)。とにかく幾つものプロセスを経て、ようやくポリ乳酸の前駆体であるラクチドができます。ラクチドは乳酸2個を環状につなげたものです。このラクチドを開環重合してポリ乳酸をつくり、プラスチックの原料とするんです」

参考までに白井先生からプロセスをざっとレクチャーいただいたが、記事の焦点は生ごみからプラスチックをつくる技術とは別のところにあるのでご安心を。ちなみにこのプロセスはトウモロコシの澱粉を用いた場合のもので、

生ごみを用いる場合は、澱粉が生ごみに置き換わるだけと考えて良いそうです。

一般的に、プラスチックはリサイクルすればするほど、質が落ちる。また、分解しにくいいため、もとの原料に戻すことは至難の業だ。しかし、ポリ乳酸は、「生分解性プラスチック」と呼ばれ、自然に土に返るといふ長所を持つ。「土の中で分解するぐらいですから、化学



これが、ポリ乳酸

的には容易に分解することができます。このポリ乳酸カップ(写真参照)は、いわば精製された乳酸のカタマリです。

私たちが開発したのは、使用済みのポリ乳酸カップが集まりさえすれば、それをケミカルリサイクルして、1工程でラクチドに戻す技術なんです。澱粉や生ごみを使った場合のような、長い工程は不要です。そして最大の特長は、

ケミカルリサイクルを重ねることに、理想的なプラスチックへとアップグレードすることなんですよ」

なぜアップグレードするかは、プラスチックが高分子ポリマーという、鎖のようにつながった巨大な分子構造であるのと関係している。一般的なプラスチックのリサイクル工程では、高熱処理を行うが、高熱を加えるとこの鎖は切れてしまう。切ればプラスチックの質が落ちる。しかし、ケミカルリサイクルでは、ポリ乳酸をその前駆体であるラクチドに戻す。このラクチドはいわば鎖の「もと」であり、そこから再びズラッと鎖を伸ばすことができる。

この鎖が長いほど高品質なプラスチックというわけだ。しかも、白井先生が開発した技術は、集まったバイオプラスチックに汚れがあろうと、他のプラスチック原料(例・ポリエチレンなど)との成形体であるうと、その中からラクチドだけを回収することが可能なのだ。

しかしながら、意外な短所もある。ポリ乳酸カップにお湯を入れると写真のように、グニャリと変形してしまうことだ。これはポリ乳酸のガラス点移動



お湯を入れると変形



左からポリ乳酸カップ→メガホン→バングル(プレスレット)

(※プラスチックの弾性率が急激に低下する温度)が低いためであり、一般に普及しているポリスチレン製のプラカップが、熱い飲み物を入れても変形しないのは、ポリスチレンのガラス点移動がポリ乳酸より高いからである。

### 「質」とともに「物」としてもアップグレードが可能

「これではどうにもならないわけですよね(笑)。しかしながら分解が容易で、リサイクルするたびにアップグレードするという長所がありますから、その長所を利用して、長くはもたないけれど、大量に必要だという製品に加工し、市場で物としての役目を終えた後、また新しい製品へと生まれ変わらせるんですよ」

つまり、循環の入り口となる製品は、ワンウェイカップのように短命であっても、リサイクル工程でラクチドを回収し、次はポリプロピレンと混ぜ合わせて再びプラスチックの原料にすることで、例えば写真のようなメガホンへと生まれ変わる。ちなみに両者に含ま

れるポリ乳酸の量は同じだが、商品価格でいえば10円程度から、400円程度に跳ね上がったことになる。

「そういう価格的なことも含め、アップグレードが可能なんです。例えば、カップの次は家電製品のボディになったとします。5年なり、10年を経て、家電リサイクル法で製品が回収されれば、そこからまたラクチドを取り出し、今度は車の内装に使われると。おそらく、20年もすれば、また車がリサイクルされ、その工程でラクチドを取り出すんです。それで最終的には、このバングル(写真参照)のような、何かシンボリックな再生ポリ乳酸製品をつくってもいい。大切なのは「非石油度」を上げていって、石油の寿命を延ばすことなんです。しかし、お話ししたようなスパイラルに組み込むことがなかなか難しい。私たちはそれをわかりやすく社会に提示するために、スパイラルの真ん中を省いた、最初と最後の部分に取り組んでいるんです。それでもスパイラルの最初に当たる、使用済みのポリ乳酸カップをどうやって集めるか、費用的にも難しいところですね」



## 荒波からのスタート。 バイオマスプラスチックの 社会デビュー

このポリ乳酸カップ（バイオマスプラカップ）は、現在、白井先生自らが設立したNPO法人「北九州エコ・サポーターズ」が手がける「バイオマスプラカップ循環事業」を通じて販促活動が行われている。バイオ起源ゆえ、ポリスチレン製のカップより割高（※ポリスチレン製カップの小売価格が1個当たり3〜4円に対し、バイオマスプラカップは10円弱）で、冷たい飲み物専用、白井先生曰く「物として良くない」。しかし、05年にバイオマスプラカップを回収してケミカルリサイクルの実証実験を行うという事業主旨に賛同したミュージシャン・坂本龍一氏のジャパネットア一会場で、いよいよ社会デビューを果たすこととなった。以降、その実績とバイオマスという切り口が認められ、納入先はヤフードーム（福岡市をはじめ、野外系イベント等の会場へと広がり、昨年の取引実数は数十万個にのぼる。しかし、これに対して白井先生の

見方はシビアだ。「考えが甘かったといえど、これまでですが、『環境』というところで高くても買ってもらえるだろう」という胸算用があった。ところが普及段階になってみて、環境というのはあくまで結果だということがわかってきたんです。良いもので安いという大前提があつて、おまけに環境にやさしいという付加価値があるのなら、それまでの業者さんを切つても取引しましょうと。企業をはじめ、これが社会の当たり前なんですよね。でも、それが大学にいるとわからない。『地球の持続性を考えればこうあるべきだ』と『べき論』に落ち着

いてしまつて、実際にお金を払う企業や、飲み物を買うお客様のことは二の次だし、誰も現場に行つて使つてくれないと、頭を下げるんじゃないでしょ」写真のメガホンも、某企業のある部署から、エコプロダクツとして優先するという話の流れで製品化に至つたが、同じ企業内の別部署から、（自社製品があるのに）パイの取り合いは勘弁してほしいと待たされたが、結局、納入を見送つた品だ。しかし、甘くない現実が、京都市内で江戸末期から続く仏具屋の息子に生まれた先生には、逆にしつくりくるぞうだ。



「私は京都の仏具屋で育ちました」白井氏

「ある意味、それが自分が育った社会であり、家のまわりの常識なんですよ。ですから、九州工業大学に来るまでは、大学の姿勢に対して何となく違和感があった。こちらに来て、こういう研究をやり始めて、やっと息がしやすくなりました(笑)」

生ごみからプラスチックをつくる技術とともに、マレーシアのパームオイル産業においては、パームバイオマスの第一人者として知られる白井先生だが、ここに来て研究の領域は、「どうしたらエコプロダクツを買ってもらえるか」ということにまで及びつつある。「大学をはじめ識者が論じれば、結局、べき論」の延長で、法律でがんじがらめにして、という流れになる。これではなかなか多くの人はついて来ませんから、そこに普及の難しさがあります。どうしたら買ってもらえるのか、それには大学での基礎研究と実際の現場が両輪で動いていかないと駄目だろうと思います。ですからNPOで物販を手がけながら、大学の研究室と情報交換をしつつ、社会の現状はどうなのかというところを見ているんです」

## コミュニケーションビジネスによる循環型社会の実現——川上から川下まで」が守備範囲

川上の技術開発から、川下の社会普及まで、白井先生の守備範囲はあまりに広い印象を受ける。

「僕たちは社会システムの研究を行っているんです。システムをどうやって社会に根付かせるか、この部分は実はやってそうで誰もやってないんですよ。普通、大学サイドとしては、それは企業におまかせという話になるのでしょうが、冗談じゃありません(笑)。企業は儲けがなければできないでしょ。売っているものが売れなければ給料が出ない。そういう状況の人たちに、僕たちがやっているようなことをやってくださいと言って、誰がやりますか(笑)。何の保証もない事業ですよ。だから、社会のために自分たちでやるんです」

白井先生がNPOを通じて事業に乗り出したのには、九州工業大学の motto も大きく関係している。

「他の大学と違うのは、地域社会への貢献だとか連携を、お題目で唱えるところ

は多いですが、現実に行っている大学は、あまり見たことがない。それをここでは本当に「やっている」ことが違うんです。僕もあまり学術的なところをめざしているのではなく、論文も書かなくちゃいけないんですが、それでどうこうといった野心はないんですよ。それよりも、大学での研究が世の中にどう広がっていくのか、こちらの方が重要だと思っています。でも、この考え方は教育機関の中ではタブーでしょうから、だからNPOで完全に自活型にしているんです」

北九州エコ・サポーターズの定款には、大学の技術を実現化するための支援を行うNPOという文言がある。NPOが描くビジネスモデルは、地域を活用したりサイクルシステムであり、システムの中で人手が必要なセクションに、地域のお年寄りや障害者を積極的に雇用したいという考えだ。

「例えば北九州市内の若松区は高齢者の町として知られ、日本の将来を先取りしたような地域と言われています。また、自分の娘がダウン症ということもあって、知的障害者の授産施設の在

り方には、かねてから憤りを感じているんです。知恵も体力もある人は放っておけばいい。どちらかがないという人のために、どのような新しい事業が実現可能なか。一つはバイオマスプラカップ循環事業が地域と連携しながら軌道に乗り、地域の収益が上がるようにしていきたい。提案だけでは誰もついてきてくれませんから、まず自分たちのNPOが生き残れることを証明した上で、社会に広がってほしいと思います。お年寄りや障害者の雇用を考えるのは、可哀想だからという理由じゃないんです。お年寄りがいない地域はないし、授産施設も各地域に存在し、しかも苦しい経営事情を共通して抱えている。この北九州市で事業モデルが確立されれば、地域ごとに可能性があるのだから、全国に普及していくことも可能でしょう。それで全国規模のネットワークが構築されれば、エコプロダクツの在庫を抱えなくていいという利点があります。こういった社会システムを構築するために、僕は生ごみを資源にする技術を開発したわけで、これまではポリ乳酸にしていたけれど、そ

れでは商売にならないのでエタノールにしましょうとなっても、僕は何でも構わないんです」

その言葉どおり、新日鉄エンジニアリング(株)との産学連携により、大学からも程近い北九州エコタウン内にある同社の北九州環境技術センターと廃棄物発電所であるエコエナジー社において、白井先生の技術をベースに、生ごみからバイオエタノールを製造する実証実験が、今年4月から本格始動した。

「ただしこれは、生ごみが地域の中で、逆有償で処理されるからこそ支えられる話なんです。最近、『生ごみは宝だ、とても価値がある』という論調をよく耳にしますが、価値があるのだから生ごみに値段をつけて流通させましようという話になってしまうと、コスト上、エタノールを製造する話はオジャンになります。その点を社会に理解してほしいですね」



北九州エコタウンにあるケミカルリサイクル実証設備



## バイオマスプラスチックの ブレイクは商品開発がキー

北九州エコタウン内には、生ごみからポリ乳酸をつくる一連の工程を手がける「九州工業大学エコタウン実証研究センター」がある。白井先生がセンター長を務め、NPOと連携のもと、ここでケミカルリサイクルも行われる。同大学にはこうしたセンターが10近くあり、各センターとも独立採算制を敷いているのが特徴だ。

「厳しいと思われるかもしれませんが、地方の旧国立大学にすれば当然のことでしょうね。私たちの生ごみ事業も、言ってみればメイン銀行が大学なわけで、採算が合わなければ事業の打ち切りもありうるんです。今は滑走路を走っている状態ですが、『そろそろ飛ばないとやばいんじゃないですか』と言われています（笑）」

既に技術としては完了し、あとは商品開発がキーだと白井先生は言う。写真のバンブルもお湯に入れると変形するが、ということは子どもから大人まで、手首の太さに合わせて自分でデザ

インすることができます。

「素材の面白さをアピールしながらですね。毎年恒例のコンサートの会場でなら、去年みんなが使ったプラカップが、今年はこんなバンゲルになりましたよと、そこにストーリーが生まれるじゃないですか。再生ポリ乳酸製品がブレイクすれば、素材的には凄く弱いものでも、それを逆手にとって循環しやすいものになっているんですから、大学としては新しいリサイクルを社会に広めることになります」



大学のイメージを一新した「九州工業大学」

メーカー企業や行政など、担当者レベルへの認知も含め、ブレイクするまでは広告塔の役割も果たしたいという白井先生。大学だからと高いところに留まらず、現場に下りるその姿に共鳴する人は多いが、先生としては、これから先の2年間が猶予で、売れなければそれ相当の覚悟もあるぞうだ。

「それを家業を継いだ弟に話すと、『そんなん当たり前やん。普通そうやうで』とシラツと返されるんです。それで僕も、肩の力がスツと抜けるんですよ(笑)」

生ごみからプラスチックをつくれれば、石油の寿命を延ばすことができる。エタノールをつくれれば、穀物の争奪戦を軽減することができる。「持続可能な社会の実現」がお題目でないのなら、白井先生が産官学連携の寵児となる日は来るのではないだろうか。ふと、そう感じた。

自立自治

白井義人

● 1956年、京都市生まれ。京都大学農学部食品工学科卒業。同大学工学部助手を経て九州工業大学へ。現在、同大学大学院生命体工学研究科教授。農学博士。NPO法人「北九州工・サポーターズ」理事長とともに昨年度まで「いづか環境市民会議」会長を務める。

● NPO法人「北九州工・サポーターズ」  
www.kitagaeon.net/

〒800-0002 福岡県北九州市若

松区向洋町10-1

TEL 093-751-2811



## 養父 信夫

「九州のムラへ行こう」編集長

news report 2

Key person of Kyushu of  
green tourism

農林水産省が初めてグリーンツーリズムを定義したのは、1992年のこと。それから15年が経過する中で、日本のグリーンツーリズムは「東の遠野、西の安心院（あじむ）」と言われるよう、大きく二つのメッカを形成するにいたりました。今号の特集では、後者の安心院（大分県宇佐市）をはじめ、九州グリーンツーリズムの歩みを雑誌編集長の職とともにリードする、養父信夫さんのインタビューをお届けします。

- 福岡県福岡市博多区
- 2007年10月

# 九州グリーンツーリズムの キーパーソンに 会いに行こう！

M・O・Hレポート2  
〈九州・持続可能な社会へのFLYームラを身近に〉



左から元祖「九州の村」、刷新「九州のムラ」、最新「九州のムラへ行こう」

## 九州グリーンツーリズムに 新たな風、トヨタ「Gazoo Mura(ガズームラ)」とは？

安心院は養父編集長ともつながりの深い土地だ。最近のホットな話題として、今年3月この町を舞台にトヨタカローラ博多が主催する「Gazoo mura(ガズームラ) 宿泊体験キャンペーン」が行われた。トヨタの試乗車に乗ってやって来た福岡市内の14の家族が、安心院に15軒ある農家民宿で1泊2日の農泊を体験し、「安心院ワイナリー」(※安心院はぶどうの産地でワインが特産品)でのワイン祭や鑑(こた)絵(え)散策、しいたけまんじゅう作りなどの体験イベントに加え、夜は農家民宿のおかみさんやご主人とともに食卓を囲み、語らいの時間を楽しんだ。

ガズームラとは、昨年12月に始まったマチとムラを繋げるトヨタのプロジェクトの総称だ。ガズームラは養父編集長が率いる「九州のムラ」の提案により産声を上げ、安心院とともに、九州グリーンツーリズムの先進地である同

じ大分県の佐伯市蒲江<sup>かまえ</sup>、熊本県阿蘇郡小国町<sup>おぐに</sup>の3地域で活動を開始した。

「民間企業のトヨタが、ムラを応援するプロジェクトを本気でやり始めたという事です。もともと「Gazoo(ガズー)」とは、トヨタ車の販売促進を目的とするポータルサイトとして立ち上がったサイトですが、車のユーザーのニーズが時代と共に多様化してきており、そのニーズに対応し、豊かなカーライフを応援する“ためのサイトにするために、コンテンツを充実していく方向性の中で農産漁村の情報も積極的に取り込んでいます。具体的にはスロークーリーフやスローフード、ロハスといった世の中の志向を反映して、農産物直売所、農家レストラン、農家民宿、体験スポットなどグリーンツーリズムに関する地域側のコンテンツを拡充しています。従来の「見る・食べる・遊ぶ」的な観光情報の他に「作る・語る・学ぶ」的なグリーンツーリズム情報を農山漁村から発信して、都会の人の目をムラに向けさせるようなところから、ガズームラは始まりました」

情報発信のツールは、ガズーサイト

上のブログだ。先の3地域で農家民宿を営むなど、マチとムラの交流に関わる人たちがブログの書き手となり、日々の交流のひとつコマや農山村の暮らし歳時記など、ムラの情報をアップし始めた。中には70歳にして初めてパソコンに向かい、ブログに挑戦する。IT婆ちゃん“も現れたそうだ。

「農家民宿をアピールするにも一般的な旅の情報誌だと、5千円以下で泊まれる安い宿特集で、他と一緒くたにされかねない。そうすると、なぜ食事に肉がないの、なぜ布団を敷いてくれないのとなります。農家民宿では交流の時間が長いですから、迎える側と訪れる側の理念が合わなければ、お互い不幸なことになるんです。ムラの人は、親戚の家に泊まるような、そういう心の交流をわかっている人に来て欲しいんですよ。そのためには事前に情報がなければ、わかりませんからね」

ブログを介して、ムラとマチに接点ができる。そして、ムラに興味を持った人がコメントを返すなど、ネット上でバーチャルな交流が始まる。

「ムラの世界にハマった人だけがサイ

トの常連になって、いよいよパーチャルからリアルな交流を望むようになった時、各地にあるトヨタ販売店が場合によっては試乗車を貸し出してくれたり、宿泊代の一部を負担してくれるという仕組みです。企業側にとってはCSRとともに、お客様とつながるきっかけにもなります。宿泊体験キャンペーンを通じて、試乗・宿泊・交流体験すべて含めた思い出が、新車購入の実際の動

機につながったケースもあります」

九州の3地域から始まったトヨタの同キャンペーンは現在、プロダをアツプする農漁村の数が、九州全7県にまがり14に増えた。

## 九州の自然児が「九州のムラ」編集長になるまで

養父編集長の仕事は「九州のムラ」

を発行するメディア事業と、地域づくりのコンサルティングとして活動するムラ事業の二つを車輪のごとくとする。どちらの事業にも共通する理念は「ムラの生命をマチの暮らしに、マチの活力をムラの生業に」だ。マチとムラに橋を架けるような現在の役割を、見つけるまでには紆余曲折があったという。

「僕は宗像大社の宮司の息子として生まれました。宗像大社は玄界灘の沖ノ島にある「沖津宮」と大島にある「中津宮」、そして宗像市田島の「辺津宮」の総称です。大島の漁村と、田圃ばかりの田島で大学2年まで過ごしました。親も子の世代も、とにかくムラから外へ出る、マチに幸せがあるという考え方で、僕も大学卒業後は株式会社に入社して東京へ出ました。ちょうどバブルの絶頂期も経験して、最先端の情報通信の仕事に携わって10年。自分が消耗されていることに気づくんですよ（笑）。このまま東京にいるのはちょっと辛いかな……。それと、東京に出て初めてわかったことですが、僕が田舎者コンプレックスを感じるように、東京の人も東京にコンプレックスを感じ



ているんです。なんだお互いが悩んでいるのかと。話し合えばお互いがもっと豊かになれるんだから、マチとムラを繋げるようなことがやりたいなあと、漠然と考えるようになりました」

自分の天職を考え出したのが35歳の頃。自分は何がやりたいのか、そのキーワードを求めて、人が最期に見るといふ人生の走馬灯を、自分だったら…と、思い描いてみたそうだ。



九州の良さを人につなぎたい

「長野に暮らす母方の祖父は彫刻家でした。自然大好き爺ちゃん、夏休み一緒に八ヶ岳の山の洞窟でヒカリゴケを見たこと、霧が峰を流れる川の源流でガーネットの原石であるザクロ石を採ったこと、忘れられない体験です。

『自然』と『旅』の二つは、自分を形成する上で欠かせない要素だと思いましたが。それと同時に祖父母から父母、自分へと遺伝子のつながりを考えると、

『つなぐ』が一つのキーワードじゃないかと思っただけです。僕の父親は、神道のアニミズムを通じて、自然と人間を結びつける役割をしてきたんだなと」

自然、人間、つなぐ、浮かび上がったキーワードから、さらに2年余りをかけて、自分の思いを発酵熟成させたそうだ。

「いろいろな本も読んだりして、その時にグリーンツーリズムという言葉に出会いました。ヨーロッパでは自然豊かな農山村へ、地元のワインを目当てに都会の人が訪れ、村人と交流を図り、それで村は活性化し景観も守られ、云々」と理想の世界が描かれていました。自分もこういう世界をやりたいと、調べてみましたがそれを手がける民間企業がない。成り立たないことに気づかなかったんですね(笑)。それで自分で九州観光研究所」という会社をつくり、一人で九州の農山村を訪ね歩くようになりました」

リクルートを退社し、グリーンツーリズムを広げる活動を開始したのが98年の頃。偶然にも97年に安心院では「グリーンツーリズム研究会」が発足し、

小国では「九州ツーリズム大学」が開校した。九州グリーンツーリズムの第一波となる人たちが、ちょうど活動を起こし出した時期だった。

「安心院にも何度も足を運び、いろんな人に出会っては『あんだ、何する？』『仕事にならんばい』と散々言われました(笑)」

そこから最初に手がけたのが雑誌の仕事だった。情報を発信するところに情報は集まってくると、当時既に廃刊状態だった「九州の村」編集長のもとを訪れ、再創刊を持ちかけた。

「95年に「九州の村」は創刊されて、創刊号で当時まだ一般的でなかったグリーンツーリズムに着目して、農家民宿の原型をつくりだすとともに、それを記事で取り上げていたんです。ムラの爺ちゃんや婆ちゃんの顔写真のアップがいきなり出てきたり、噛めば噛むほど味のある雑誌でした。それで、初代編集長の意思を引き継いで、僕が二代目編集長を務めることになったんです」  
98年2月、「九州の村」は「九州のムラ」として再創刊された。

## 「今一步」の閉塞感を、 民間の中の可能性とともに 突き抜ける

「グリーンツーリズムを広げること、僕自身もそれについてをもっと学ぶため、特集で追いかけてながら雑誌と並行して進化してきた感じですよ」

九州のグリーンツーリズムを追いかけ、ムラを見つめる中で、自分の役割が次第に見えるようになった。

「農村は厳しい状態です。10年後にここで農業をやっている人はいなくなるかもしれないと思うこともあります。それが僕自身の危機感になって、おせっかいでも行政に仕掛けてグリーンツーリズムをやりましょうと言いつづけてきました。でも、地域と行政だけでは、進んでいることは確かなんだけれども、今一步、突き抜けていかないんです。それで、最終的に『いちムラの人』といちマチの人の交流につながる、企業の中に入れてもいいんじゃないかと考えるようになりました。ですが、ムラ側にしてみれば企業というのは敷居が高い。

企業がいきなりムラに入ってくることで、自分たちが消費されてしまうのではないかという怖さもある。でも、企業もお客様があればこそ成り立つわけで、お客様のニーズを先取りして、その企業に合ったプロジェクトなりの形に組み立てることが、僕ならできる。リクルートでの経験とムラの情報がありますから、両方の成熟度を見ながら、民間企業の中にある可能性と、ムラとの連携を考えたいんです」



JRとタグを組んだ「わくわく体験きっぷ」

最初に仕掛けた民間はJR九州だった。02年に夏休みの家族旅行をターゲットに発売された割引切符に、子どもたちが農漁村で様々な体験のできる「わくわく体験切符」をセットにして売りました。



家族も楽しむ「マリノアシティ」

「割引の料金を作っても、そこに感動ソフトがなければ人は動きません。夏休みに子どもを自然の中で遊ばせたい、学ばせたいと思う親は多い。でも二十代、三十代の親だと彼ら自身、自然体験を持ってないことが少なくありません。頭ではわかっていますが、カブトムシの一匹も採ることができない。それなら、それができるムラの人にインスタクターになってもらえばいいんです」



平日もにぎわう「九州ムラ市場」

**ムラの食を発信。  
消費者が成長すれば  
日本の農業は聞える**

民間とムラの連携を試行  
錯誤する中、「旅」と「食」

が大きなテーマになると気づいた。そこで「食」に焦点を合わせ、イタリアのスローフード協会が主催する「食の祭典」にヒントを得て企画したのが、九州最大級のアウトレットモール「マリノアシティ福岡」の一角にある「九州のムラ市場」だ。地産地消の視点のもと、九州一円からスローフードがセレクトされ、実際、現地を訪れると農産品や加工品、食肉から鮮魚までが揃い、九州の食文化が凝縮されたかのようなスポットになっていた。ちなみにマリノアシティ福岡は若者に人気のデートスポットで、年間5、6百万人の来客数がある。

「ヒントにした食の祭典には、約550のブースが出揃います。そのうち100のブースはスローフード協会が認定した生産者のブースで、牛や豚、野菜など従来の種を守り、昔と変わらぬ手法を用いるなど、伝統的なものを持っているんです。協会側はそれをパネルできちんと紹介しているんですが、実はムラの生産者にとって、そこが一番苦手なところなんです。自分たちにとっては当たり前のことだから、マチの人には何をどうPRすればいいのかわからない。



「美味しそう!」新鮮な魚

そこを協会は上手くフォローしているんです。九州にも農産物直売所は1000箇所以上ありますが、都心部の消費者全体からすれば、その内の3割程度しか利用していません。残りの7割、直売所の存在すら知らない消費者を、どうやって巻き込むかが大きなテーマなんです」

「食」を通じたマチとムラの交流は、ここ数年、養父編集長の中で大きな課題でもある。

「BSEの問題が世間を騒がせた時、社会人学生として学んでいる大学の恩師が都心部の不特定多数の消費者を対象に、食の安全に関する意識調査を行いました。結果としてわかったことは、消費者自体が複数に分類されることです。食の安全に高い意識を持ち、生産者を支援する活動まで行っている人が全体の5〜6%。高い意識を持っているが、生産者と一緒に行動するまではいかなくて、でも直売所や生協などを利用している人が約17%。この人たちは、既にムラの応援団といえます。そして30%は、安全や安心はどうでもよくて、食糧は輸入すればいいという人たち。



店内は満席「自然のしずく」テイクアウトも好評



スタッフが「持って帰りたいあ〜い」と  
タダをこねた野菜売り場

一番問題なのは、残り50%近くの人で、意識はあるけれども、行動にはつながっていない。この人たちが今後、どうでもいいという30%の方にまわれば、日本の農業の明日はありません。でも、意識の底上げを図って、ムラの応援団の方にまわってもらえれば、まだムラの農業は闘えます。ですから、この人たちを上にあげる仕掛けを、徹底してやっていこうと考えているんです」

### デメリットをメリットに変えるのがツーリズム

どうやってマチとムラの交流を図るか、どうすればムラを応援できるか。養父編集長はそのためのステップを踏

み続けてきた。

「ヨーロッパのツーリズムを見ていると、例えばドイツに人口8百人程度の小さなムラがあつて、村人の約3百人は専業農家で、主要な作物はブドウです。彼らはムラの醸造組合でワインを造り、それでムラの経済が成り立っているのですが、安くは売らないから成り立つんです。ムラのワインは大手メーカーの品と違って、無名だし、味も年によってバラつきがあります。おまけに値段も高い。普通に考えればデメリットだらけですが、それをメリットに変えるのがツーリズムの仕組みなんです。マチの人に来てもらって、自分たちのことを知ってもらおう。ムラのワインセラーや、農家の主人が話してくれるワイン造りの蘊蓄やこだわり。地元の旨い料理と一緒に地元の人々の案内付きで、大きな樽から次々にワインを試飲する。そうすればファンになってしまいますよね。少々値段は高くても、大手メーカーが不特定多数に向けて売り出すワインより、自分にはこのムラの経済は成り立つんですよ」

養父編集長は、交流の先に定住を想定して、さらに九州グリーンツーリズムの未来を描く。

「今、ムラで農業をやっている爺ちゃんや婆ちゃんは、10年後にはいなくなってしまうかもしれない。後継者として子や孫がムラに帰ってくる確率よりも、まったくムラを知らないマチの人が、ムラに入ってくる確率の方が高いと思うんです。そのためにも、この10年ぐらいをかけて徹底的にマチとムラの交流を仕掛けるつもりです。それと並行して、第一次産業だけで食べていけるほど世の中は甘くないので、ツーリズム的要素を複合して、何とかムラの中で新規住民が成り立っていきける新しい生業を、どう創出していきけるかが僕の中で今一番、大きなテーマですね」

「九州のムラ」は、この春に20号の発行を記念して「九州のムラへ行こう」と誌名を新たにしました。

「九州のムラ」サイト上で養父編集長が綴る「webムラコラム」に、05年、タイトル「十周年記念号

発行」の文中、“20周年は「kyushu no mura」を”とあった。養父編集長は九州グリーンツーリズムとともに、ムラを世界に牽引するつもりがあるのだ。



仕掛けがいっぱい  
「九州のムラへ行こう」



「まだまだ、これからが正念場」と養父氏

今の生命と今の暮らしに  
日々の営みと今の生業に  
心をこめて行こう

養父信夫

● よつふのぶお 1962年、福岡県生まれ。1986年、九州大学法学部卒業。同年(株)リクルート入社。1988年、独立しグリーンツーリズムを広げる活動を開始するとともに、「九州のムラ」発行に携わる。現在、同誌編集長とともに、九州全域で講演や地域づくりのアドバイザーなどグリーンツーリズムやスローフード運動の啓蒙活動を積極的に行う。今年は休学中だが、熊本大学社会文化科学研究科博士課程在学中。

● 「九州のムラ」[www.kyushunomura.net](http://www.kyushunomura.net)  
出版室／(株)マインドシェア 〒812-0013 福岡市博多区博多駅東2-5-19  
サンライフ第3ビル

TEL 092-418-3100

● 「Gazoo mura」[gazoo.com/mura](http://gazoo.com/mura)

# 命と土と愛に感謝。 『もったいない食堂』で いただきます。



長谷川 貴士  
株式会社ティア

## news report 3

I thank for life and soil and love

カメラマンから「九州に『もったいない食堂』ってあるよ」と聞かされたとき、冗談だと思いました。ネットで検索すると「これは、本気や、本物や」と心が騒ぎました。外食産業に“もったいない精神”が浸透するとき、命の大切さが浮き彫りになります。

- 熊本市／熊本市市民会館内  
「もったいない食堂 IKOI CAFE」
- 2007年10月



市場には並ばない「もったいない食材」



古民家の土と梁、原木を利用したテーブル、  
ランプシェードはコーヒーの麻袋、作家の陶  
器がさりげなく（メッセージが書いてあるよ）  
「IKOI CAFE」店内



規格外の無農薬・有機野菜を  
メインの食材に

熊本市民会館の1階にある「もったいない食堂 IKOICAFE(いこいカフェ)」。規格外という理由で流通には乗らず、廃棄処分もしくは飼料等になるより他なかつた無農薬・有機野菜や魚を、その名のとおり「もったいない」の精神でメイン食材に用い、手作りした惣菜を主に定食メニューで提供するお店だ。

その日に仕入れた食材に合わせ、日替わりの惣菜が盛られたのは、本物の着物生地を樹脂加工したという華やかな漆器。お浸しや焼き魚、煮物といったオードツクスな家庭料理が器に映える。

店内はコーヒード豆の麻袋をシェードがわりにした照明や、奥との間仕切りに使ったアンティーク調の木の扉、剥き出しになった天井の梁、素材の質感を残した土壁など、それぞれに主張を感じさせる。

同店を手がけるのは、98年に熊本市内で開業した無農薬・有機レストラン



満腹になります。おなかも心も健康も・・・

「土に命と愛ありてーティア」だ。株式会社ティアの本部スタッフ、長谷川貴士さんにお話を聞いた。

「木製の扉は市内の古民家を取り壊された時に出た廃材です。梁はクスノキとタブを真ん中で接いでいます。漆器もそうですが、棟梁や左官職人の昔ながらの高度な技が失われつつありますよね。それはもったいないことです。それから、店舗づくりを通じて、ささやかながら支援しているんです」

規格外の野菜や魚を食材に使い出したのは、ティアの方が先輩格だ。しかし、ティアはビュッフェスタイルで、取り過ぎたお客様の食べ残しも少なくはない。お客様



「私は彦根にもいました」長谷川氏

につい欲張らせてしまうスタイルは外食の「楽しさ」であつても、「日常」であるためには、さらなる進化が必要と、05年に「もったいない食堂」の一号店(熊本良町店)を開業させたのに続き、今年8月1日、二号店となる同店の開業に至つた。

「無農薬や有機栽培の野菜には虫が付きやすいんです。曲がったものや小ぶりなものを合わせると、育てた野菜の半分近くは捨てなければならぬ。それは見た目の問題であつて、味や品質は同じです。そういう、リストラ野菜に値段をつけて、生産者を支援しようというのがティアの方針です」

ちなみにティアは、熊本本店をはじめ、九州地方以外にも茨城県、岐阜県などに合計14の「家族店」がある。家族と呼ぶのは、各店とも「食と農を守る」というティアの考え方に共鳴した、個人によるオーナー制だからだ。

「ですから外観や席数など店舗の統一規格は何もないんです。食材は無農薬・有機野菜であること。調味料も添加物が一切使用されていないもので、その原材料も極力、無農薬であること。この決め事に対して嘘をつかないことが唯一の条件でしょうか。食材の調達は各店に一任していますが、その一方で要望があれば、ティア本部から食材を供給するルートも整えています」

ティアの各店舗が百貨店だとしたら、もったいない食堂はコンビニエンスストアのような位置づけなのだという。

「ティアは、それなりの規模（広さ）が必要ですが、もったいない食堂は省スペースで運営できます。投資額を比較しても、もったいない食堂はティアの10分の1程度ですから、団塊世代の方々にもチャレンジしやすい業態ではないかと思えます。商圏人口を考えると、

ティアの店舗数をむやみに増やすわけにはいきませんが、その分を身近で気兼ね存在のもったいない食堂がカバーしていこうと。根底にあるのは、私たちの役割は消費者への架け橋になることだという思いです。ですから、お金の問題よりもむしろ、もったいない食堂が増えることよって、無農薬で頑張つて野菜を作られている方々から、もっと野菜を買うことができる（農家の現金収入を増やせる）。近所の方々が、気軽に安心な食材や惣菜を購入でき、食事もできる。そして、今まであまり「食」に関心のなかった方々が、子どもや孫の代、ひいては日本の未来を考え、命を育むきっかけを提供できるのではないかと。私たちが明瞭な意識を持つことで、もったいないという気持ちを社会により広げていければと思っています」

## 命の源である食と、 食の生産者への思い

ティアの代表取締役・元岡健一さんは、ティアを開業する以前、大手外食チェーンの社長として腕を鳴らした人物だ。

しかし、大手といっても元岡さんの社長就任時、店舗数はわずか5店で、会社は赤字経営にあえいでいたそう。当時の話を長谷川さんからうかがった。

「私も入社後に、元岡からおおい話を聞いたのですが、最初は嫌々社長に就任したそうです。でも、しばらくして5店舗で働く従業員に対し、職場を奪ってしまったのもったいないと思うようになりました。そこで業績を立て直すため、美味しさの追求に専念し、一つは日本一おいしいお米を提供しよう。それで全国各地を訪ね歩き、当時はまだ無名だった魚沼産コシヒカリを見出しました。でも、それが世間に認知されるようになると、逆にブランド米として価格が高騰し、味で負けないお米を新たに探す必要が出てきたんです。その時に出会ったのが長崎県雲仙の千々石の棚田米です。棚田を作る農家の人から、農業はもとより棚田米のおかれた厳しい現状を聞くうちに、生産者を支えたいという思いに至ったのだと聞いています。それと、元岡は50歳の頃に、背中ので腫瘍で二度、大きな手術を受けました。病気がきっかけで、



元岡社長を紹介する記事

元岡社長(右)森川副社長(左)ティア本店前にて

命の源である食について深く考えさせられたことが、現在のティアのスタイルを生んだんです」

美味しさの追求の結果、店舗数は60店近くに膨らみ、株式の上場とともに、大手と呼ばれるようになってきた。しかし、長谷川さんが話してくれたように、元岡さんは健康上の理由で社長の職を退き、体の回復を待って、食への思いを結実させるべく個人での開業に挑んだのだ。

その後、命を支える食へのこだわりや、リストラ野菜に光をあてて農家を支援しようというティアの理念は、外食業界の中でも注目を集め出し、長谷川さんも業界誌に掲載されていた元岡さんの記事を読み、熊本本店にまで足を運んだという。

「それまではラーメンチェーン店で働いていました。ラーメンの作り方や味の統一化、コスト面での集約化が進めば進むほど、自分がお客様に食

べて欲しい味とは離れていくような気がしていたんです。その疑問が元岡の記事を読んで、さっと晴れるような気がしました。実際にティアの食事を食べてみると、これは三食続けて毎日でも食べたい味だと(笑)。体がラクになるというか、第六感で感じるおいしさだったんです。食べることは命を分け与えることだと思のですが、それがきちんと行われているから、ティアの味があるんだと思います」

ティアに、いわゆるシェフは存在しない。家庭の主婦でもある女性スタッフが、店舗ごとの厨房で本物の家庭料理を作るからだ。

「世界的には日本食ブームなのに、当の日本では家庭料理が食卓から追いやられていますよね。手軽に買える惣菜は、それらしい味ではあっても、消費者にしてみれば食材と一からつきあうものではありませんから、命や生産者に感謝する心が薄れて当然だと思います。そういつた中で、家庭料理を守ることもティアの使命の一つだと考えています」



木をあしらった美しい店内



樽のオブジェも



厳選された食材が購入できる

## 地域と連携した 「もったいない食堂」も誕生

日本の食と食文化の衰退に、「待った」をかけるようなティアの取り組みだが、外食産業として採算性は合うのだろうか。

「私もメニュー開発を任されて、まだ原価から発想しているとよく叱られます（笑）。会社の持続可能という点では、採算を合わせることも大事なのですが、元岡の考えはそうではないんです。それよりもティアももったいない食堂に関わる人間が挑戦すべきは、「もったいない」という気持ちで、生産者を守り、日本の伝統を守り、家庭料理の味を守ることだと。それを外食産業として実践し、業態を変えていくとするのは難度の高いことですが、やり甲斐は大きいですね」

ティアでは、佐世保魚市場（長崎県）の有志と共同で「魚市場もったいない食堂」をオープンさせた。今後、地域と連携した出店の可能性も、十分に期待できるのではないだろうか。佐世保近海で行われる巻網漁業では、消費者

なじみのない魚も、足のとれたタコも、大きすぎたり小さすぎるとる魚も網にかかる。それらを食材に用いるのはもちろんだが、アジをたたいてコロッケにしたり、サバをピリカラのミリン漬けにしたり、商品開発にも余念がない。

「規格外の食材を活かすには、おいしくないと駄目なんです。商品開発の



IKOI CAFE スタッフ

アイデアは元岡の発想がほとんどです。自身が納得のいく食材や調味料を求めて、一年の大半は全国を訪ね歩いています」

もったいない食堂は、今後1000店舗の出店を目標にしている。

「食は命」ということを、私たちはいつの頃からか、ぞんざいにしてきた。我が家のキッチンに、もう一つのもったいない食堂をオープンするつもりで、料理してみるのはどうだろう。特別なものは必要ない。ご飯の炊き上がる匂いや、旬の野菜の色、トントんと



「心を込めて調理します」

まな板の響く音、あとは「もったいない」という感謝の心だ。

も、た、い、な、い、  
への、お、び、に、感、謝、!!

長谷川 貴士

●はせがわたかし 1999年3月秋田県立秋田南高等学校卒業。同年、4月明治大学入学。2003年4月、三井リース事業(株)入社(本社・東京日本橋)。お金と数字が最優先される世界観と満員電車で嫌気が差して都落ちを決意。同年11月14日退職。同年、11月15日(株)幸楽苑 入社本社：福島県郡山市。お客様に笑顔で接することができるサービスマンに満足する。2006年12月右肩下腺腫瘍摘出手術。2007年9月効率最優先の世界観に絶望する。退職。同年9月(株)ティア入社。現在に至る。

●もったいない食堂 IKOI CAFE II  
所在地 / 〒860-0805 熊本市桜町1番3号 熊本市市民会館内 TEL 099-351-0151

●ティアもったいない食堂  
<http://www.tia-nagasaki.com>

# 波多野 信子

NPO法人 循環生活研究所  
理事長



# たいら 由以子

NPO法人 循環生活研究所  
事務局長

## news report 4

The community which is connected  
by the compost

## ダンボールコンポストって？

福岡市内を中心に実践者が急増中の「ダンボールコンポスト」をご存知でしょうか？ ダンボール箱の中に「ピートモス」と「もみ殻くん炭」を入れ、よく混ぜ合わせたらほぼ準備完了。あとはダンボールを雨がかからない風通しのよい場所に置き、1日5百グラムから1キログラムを目安に生ごみを投入します。約1カ月の熟成期間を経て、上質な堆肥の出来上がり。設置型コンポストと違いベランダなど台所まわりに置き、悪臭が出にくいので、集合住宅でも手軽に実践できます。特集では、福岡のダンボールコンポスト育ての親、NPO法人「循環生活研究所」を取材し、ダンボールコンポストをきっかけに、人や地域の間に「環」が芽生える様子をお聞きました。

■福岡市東区  
■2007年10月

M.O.H.レポート4  
〈九州・持続可能な社会へのFLYー活性〉

# 堆肥でつながる

# コミュニティ



あおさのかりんとう、美味しかったです。

ダンボールコンポスト講座を  
見学—どうしてこんなに  
盛り上がる？

取材当日の午後、福岡市東区内の美和台公民館で開催された講座におじゃました。会場の一室には50名近い受講者の姿。講師を務めるのはNPO法人「循環生活研究所」(通称・循生研〈じゅんなまけん〉)の理事長・波多野信子さんと、副理事長・永田由利子さんの二人だ。ダンボールコンポストに「入れているもの・悪いもの」についてひと通りのレクチャーが終わると、クイズ形式でテストが始まった。フェルト等の素材で作ったミカンの皮や魚のアラのミニチュアを、永田さんが高く差し出す。受講者は両手で大きく〇か×のポーズ。すると波多野さんが、「そうですね。魚のアラは理想的なパウアアップ素材です」と、解説を交えながら正解を告げる。二人のあうんの呼吸に、受講者の姿勢も積極的だ。少し驚かされたのは、次に続く質問コーナー。普通、こうした集まりでは、会場がシンと静まり返ることも多い。しかし、ここでは

次々と質問の手が上がる。各々の台所から出る様々な生ごみについて、コンポストに入れて大丈夫か、その場合は切り刻むなどの工夫を施すべきか、先ほどのパウアアップ素材(※堆肥化を促進する働きのあるもの。例/魚のアラ、米ぬか、天ぶらの油カス等)に該当するか等々、熱心な問いかけが続く。その一つ一つに波多野さんは、自身の経験と科学的な根拠を交えながら、的確にコメントする。その都度、会場に漂う満足感。講座を企画した公民館も、「なぜ、おたくの講座にだけは、こんなに人が集まるのか?」と首をかしげる盛況ぶりだ。

実はこの講座には続きがある。ひと月後にアフターフォロー講座が開講され、受講者はこの間の成果、つまり自分の堆肥を手にも再び集い合う仕組みだ。「堆肥の診断を兼ねているのですが、スタッフ以上に皆さんの盛上がりが凄いです。他の人の堆肥と見比べて安心したり、この生ごみを入れたらパウアアップしたとか、我が家の”糠どこ”の感覚に似ているのかもしれない」(波多野さん)

エプロンコンポスト、手品ではありません。波多野氏(左)と永田氏(右)。



## 循環研の生い立ち― 「とにかくシンプルで 人が取り組みやすいものを」

ダンボールコンポストが福岡に伝えられたのは、今から約7、8年前のこと。行政間のネットワークを通じて、札幌市から福岡市環境局へやって来たのだという。それより以前から、市が主催するコンポスト普及活動に携わっていた

た波多野さんは、職員からダンボール箱と基材を見せてもらった瞬間、「これはいいものができる」と直感したそう。波多野さんの堆肥作り歴は、およそ40年。特に専門的に知識を学んだわけではない。家庭の主婦として、庭に美しい花や樹木、健康な野菜を育てたいと、台所の生ごみや庭の雑草、植木を剪定した後の残さなどを、せっせと土に戻してきた。しかしながら堆肥には、子ども

の頃に養った「目」があった。

「母と祖父が農業をやり、牛も飼って



たいら氏の絵心が、そこここに。

いました。ですから子どもの頃から堆肥の大切さを知っていましたし、良い堆肥というのは、湯気がモウモウと立ち上がるほど熱があって、何かこうフカフカとした感触だと、五感で覚えているんです」

嫁いだ先は農家ではなく、松林を切り開いた海岸沿いの土地に新居を構えた。土壌は砂地で水はけが悪く、花や樹木が上手く育たないことがきっかけで、堆肥作りを始めた。「我が家のささやかな循環」だと、波多野さんは言う。

ところで、事務局長を務めるたいらさんと、波多野さんは実の親子である。母の姿に影響を受けてか、たいらさんは地元の環境市民団体「やかまし村青年団」に在籍するなど、環境活動に積極的な女性へと成長していった。そして「やかまし村青年団」と、地域密着型のフリーマーケットを提唱する「Free trees（フリーフリーズ）」、波多野さんが行うコンポスト研究普及活動が一つになり、平成16年9月に循環研が設立された。その思いは「快適で、簡単に、生活環境にやさしい暮らしが楽しくできたら」という言葉に集約される。





たいら氏自宅兼循環生研事務所。自然の風や断熱効果でナチュラルな住み心地。

そのため「とにかくシンプルで人が取り組みやすいこと」をテーマに、循環型のライフスタイルの調査・研究、普及、支援を展開してきた。これらの点からも、ダンボールコンポストは、理想的なアイテムなのだ。

「私自身、こんなに活動の輪が大きくなるとは思ってなかったのですが、組織だった活動を行うのは、娘の方が上手ですね」（波多野さん）

とにかく、講座の依頼が多いのだ。

### 堆肥でつながる コミュニティ

NPO法人化して3年が経過した今年、拠点となる新事務所も完成した。実はたいらさんの新居に間借りする格好なのだが、言われるまでそれに気づく人は少ないだろう。現在のスタッフは35名余り。ほとんどが女性で、実質12名程度がハードなスケジュールを切り盛りしている。

「実践に基づいたことしかすすめていない」という講座は、去年だけで260回近く開講された。一昨年の10月から福岡市で家庭ゴミの有料化（※条例が定める処理手数料1リットル／1円に

より、指定ゴミ袋は45Lサイズが45円、35Lサイズが35円）が始まり、市内の若い家族世帯にも一気に広まった感があるという。また、これをブームと捉えたNHKが、今年2月に朝の全国TV番組で取り上げたことも影響して、遠くは東京、横浜、岐阜の大垣市からも講生がやって来るようになった。ちなみに大垣市からは、この2、3カ月で5百名近くが訪れたという。

講座は個人もしくはグループの『趣味の集いに』と依頼され、そこからその受講者たちが、地元の行政に働きかけるようになる。次第に膨らむパターンが多いそうだ。

「それだけ皆さん、環境のために何かしたいという思いを持ってもらえるんじゃないでしょうか」



ほら、元気に育ってる！



いそいそと帰宅する受講生

ダンボールコンポスト講座が地域に  
落とす種は、生ごみの減量とともに、  
もう一つこんな花を咲かせる。

「とにかく地域のコミュニケーション  
が発達するんです。それは共通のこ  
とをご近所で実践するからです。『おた  
くの堆肥はどう?』と話題ができ、これ  
まで挨拶を交わしたことがなかった人  
とも、声をかけあうようになるんです」  
冒頭の美和台の講座では、年配の男  
性の姿も目立った。そういった男性同  
士、メールアドレスを交換し、我が家  
の堆肥情報を交換するケースもあるそ  
うだ。また、同地区は一戸建て住宅が

多いこともあり、堆肥で育てた花の苗  
に、堆肥をつけて、「お裾分け」するご  
近所づきあい広がっているそう。た  
いらさんが「堆肥でつながるコミュニ  
ティ」と言うように、地域の「環」が  
確実に生まれようとしている。さらに  
循生研では、堆肥を活用した「菜園講  
座」や、その菜園で育てた野菜をスロ  
ーフードとして提供し、地域の子ども  
たちと一緒に「スプリング食堂」を開  
催するなど、入口から出口まで、きち  
んとプロデュースされていることも、  
引っぱりだこの大きな理由だろう。

「私自身も堆肥作りを始めたのは、い  
い花や野菜を育てたいと思ったから。  
お楽しみがあるから長続きするのだし、  
これが本当の循環だと思っています」(波  
多野さん)

その一方で、これらを手がける循生  
研は、講座等のブラッシュアップに余  
念が無い。講座に使うイラストや小物  
の作成は、主にたいいらさんが担当する。

「今のようなスタイルの講座を初め  
て丸四年になります。この間、その場  
の空気を肌で感じながら、内容を吟味  
してきました。毎年訪れる地区もあり

ますから、内容を変えていかないと、  
お互いのモチベーションが上がりませ  
んよね」(たいいらさん)

### オーブんなNPO。 循生研は人材育成で ライバル!?を育てる

循生研は活動経費のほとんどを、ダ  
ンボールコンポストの基材販売(※一式  
2千円、基材(ピートモス・もみ殻くん  
炭、カバー)



ダンボールコンポストの中身(箱、ピートモス、もみ殻くん炭、カバー)

炭)のみ6百円)と講師料で賄う自活型のNPOだ。わずかながらの助成金は、印刷物などの備品に充てる。

「基材の価格を高くすれば、企業が参入してくるかもしれないでしょ。ですから低廉価格を維持して、自転車操業ですね」(波多野さん)

運営事情は厳しいが、これまで培ってきたノウハウをクローズなものにしたくないというのが、たいらさんの考えだ。そこで平成17年度からは、人材育成を目的とする「ダンボールコンポストアドバイザー養成講座」も開始した。「NPOの資産は、知恵」です。これを外部に出してしまうと、自分たちは



フリーマーケットも資源循環に役立っています。

やせ細ってしまうし、存在意義が薄くなるかもしれない。けれど循環研はそこを振り払って、育てるとするのはおこがましいかもしれませんが、ともに磨きあいつことをして、各々の地域でリーダーとなる人材を育成しましょうという方針です」(たいらさん)

このアドバイザー講座は、年に1度、十数名を対象に行われる、いわば精鋭主義だ。ダンボールコンポストを実践していることが前提で、単に資格を目当てにした受講者は引き受けない。ダンボールコンポストの魅力と可能性を感じる人たちがやってくる。講座の内容は技術や実践、複数の段階があり、その中で実際に循環研が開催する講座で、指導者の役割も経験してもらう。

「実際に人の中に入って経験しないと、学んだことが身につきませんから」(たいらさん)

今年のアドバイザー講座には、久留米、北九州、大垣など九つの市から受講者が集まった。

「技術の普及、地域づくり、人づくり、これがセットにならないと継続は難しいと思います。そのためのパーツ

を提供するのが循環研の人材育成で、ちょうど今、大垣市への移植作業が進んでいるところです。うちはライバルを育てているんですね(笑)」(波多野さん)

ダンボールコンポストが移植された地域は、目に見えて活性化するそうだ。低廉な価格と地域循環型であること、行政頼りでなく、新規の雇用にもつながる点や、何といってもお互いの顔が見える活動であることが、結果を導いてくれる。

「その中で大切なのは、指導者が実践に基づいた正しい判断と物差しを持っていること。アドバイザー講座が、そのための力になるんです」(たいらさん)

### 技術力と企画力、 これからも双方のタッグで

組織は大きく膨らんだが、やっていることは変わらないという循環研の活動。逆に地道なスタイルの活動を継続することで、初めて循環型が実現できるのだという思いに至った。最後に今後の展望を聞いてみた。



母・波多野氏(左)の背中を見て子・たいら氏(右)は行動する。

「これだけ広がると、それぞれの地域に人が育って、ネットワーク化することが大切だと思います。個人的にはもう少し時間の余裕が欲しいですね。自分自身が楽しみたい(笑)」  
 (波多野さん)

「堆肥の循環システムが確立すれば、それでコミュニティ自体がしっかりするんです。堆肥でつながるコミュニティ“が、地域の福祉や防犯、教育面に波及することが、循生研の狙いでもあります”(たいらさん)

よくケンカもするという両人だが、しかし、「何といっても波多野の技術です」と、タイラさんが顔をほころばせた。

土づくりを楽しむ

波多野信子

●はたののぶこ「博多生まれ博多育ち。循環生活研究所の母親的存在。通称「のぶばあ」。堆肥づくり暦40年。家からでるものを循環させる作業が日々の楽しみ。資格／環境省環境力ウンセラー 環境再生医 物質再生部門中級

## 循環生活を 楽しもう! たいら由以子

●たいらゆいこ「博多生まれ博多育ち。大学では食物栄養学を学ぶ。環境問題への関心は食や水から入り土に行き着く。大人になつてから勉強をするようになった。子ども企画やイラストを得意とする。

資格／環境省環境力ウンセラー 環境再生医 環境教育部門中級

●NPO法人「循環生活研究所」

[www.jun-hanken.com/](http://www.jun-hanken.com/)

〒811-0201 福岡市東区三苫4

丁目4-27

TEL 092-405-5217

# 火の国・熊本、持続可能な 大地へのエピソード



熊本県 環境生活部環境政策課

藤本 正浩 (中)  
課課長補佐

吉田 一浩 (左)  
参事

松尾 久則 (右)  
主任主事

## MOH report 5

Kumamoto country of the fire .  
An epilogue to the sustainable earth

## 新エネルギーの 取り組みを探る

熊本県は西日本随一の酪農県です。循環型社会へ向けてのアプローチを着実に進めている政策が見られます。環境生活部環境政策課では、バイオマス活用、風力発電、太陽光発電を積極的に取り入れています。補助事業のみならず、企業の進出にも役立っているそうです。熊本県の新エネルギーの取り組みをご紹介します。

■熊本県庁

■2007年10月



日本三名城の一つ熊本城



「環境政策課で新エネルギーの重要性を県民に伝えたい」藤本氏

## 酪農県熊本への歩みが「バイオマス」を強くする

温暖な気候と起伏に富んだ地勢を活かし、九州地方では野菜・花卉・果実・畜産などの第一次産業が盛んだ。さらに製造業全体に占める食品製造業（※飲料・飼料・たばこ工業を含む）のウエイトが高く（※事業所数は28%、従業者数は25%、製造品出荷額等は21%を占める【経済産業省「工業統計表」】）、バイオマス賦存量（※存在量）の観点からも、同地方はバイオマス利活用のポテンシャルが高いと言える。

中でも、西日本一の酪農県である熊本県では、年間約319万トンに及ぶ家畜排せつ物の7割以上を

堆肥化もしくはメタン化して発電の燃料に利用するなど、九州バイオマスのトップランナーを行く。同県のバイオマスの年間発生量は約482万トンあまりで、その内の約6割強を家畜排せつ物が占め、あとは順に黒液、農作物残さ、食品廃棄物、古紙、木質系廃材等が、いずれも7〜4%台の割合で続く。

県内に点在する代表的なバイオマス関連施設には、家畜排せつ物の堆肥化施設や、生ごみの堆肥化・メタン発酵施設に加え、九州ならではの焼酎廃液の飼料化施設、また製材端材のおがくず製造・熱源利用施設も目立つ。

「家畜排せつ物の堆肥化は、昔から行われてきたこと。県でいえば農林水産部の管轄になりますが、近年、そこにバイオマスの視点が盛り込まれ、熊本県でも平成16年度から環境生活部が、バイオマス利活用の旗振り役として普及・啓発活動を行うようになりました。それとともに関連施設も増加しています。家畜排せつ物が施設に持ち込まれることで、昔はそのまま撒いていましたから、かえって臭い等の問題は改善方向に向かったと思います」（藤本さん）



バイオマス燃料で走る市電が市内の足

先の関連施設中に製材端材をバイオマス利活用する施設が含まれていたように、熊本県が現在、力を入れるのは木質系バイオマスの利活用に向けた技術研究だ。

「全体的なバイオマス利活用の促進と並行しながらですが、熊本県は県土の60%が森林ですから、どうしても木質系バイオマスの利活用を進める必要があります」（藤本さん）

事例として昨年には、県北の南阿蘇村（阿蘇郡）で、木質バイオマス利活用調査事業が行われた。間伐材や製材端材などをペレット・チップ化し、ビニ

ールハウスの暖房燃料や、温泉施設のボイラー燃料に用いるなどの計画づくりや検討が行われ、現在はペレット・チップ利活用の事業化に向けた検討が進んでいるという。

こうした県内の気運のもと、県でも下水道汚泥の発電システムや、木質ペレットボイラーの施設電源利用に向けた試験研究事業が活発化している。

「熊本県はビニールハウスを利用した作付面積が日本一なんです。ほとんどのハウスが加温ボイラーを使っていますが、ご存知のように燃料の重油価格が高騰しています。代替燃料として木質ペレットに期待が集まっていますが、温度制御が難しいのと、調達コストの問題が、今後の重点課題です」（藤本さん）

いずれにせよ、これまでの酪農県、農業県としての歩みが、同県のバイオマス施策の礎となっているのは確かなようだ。今後のバイオマス利活用にに向けた抱負を聞いてみた。

「バイオマス利活用の本当の意義を県民の皆さんにお伝えしていきたいと思えます。あとはバイオマス資源の採算性を、いかに化石資源なりに近づけ

ていくか。そのためには、やはり技術でしょうね」（藤本さん）

### 熊本県の「風景」となりつつある風力発電

一方、年間を通じた安定した強い風を活かし、熊本県の風力発電は、平成18年度末で全国第18位の高い水準にある。県内に7カ所ある風力発電所の年間発電電力総量は、一般家庭約1万3千世帯分の年間消費電力量をまかなうことができる計算になる。熊本県では特に平成17年度以降、1基あたりの出力1700kw〜1750kwの大型風車を複数単位で設置した発電所の建設が目立つ。（※参考までに滋賀県草津市の「くさつ夢風車」は出力1500kw）

中でも県内西原村（阿蘇郡）で平成17年2月から運転を開始した株グリーンパワー阿蘇（※電源開発株とアサヒピール株の共同出資事業）は、南阿蘇の俵山の斜面に沿って出力1750kwの風車10基が規則的に建ち並び、晴れた日には約25kw離れた県庁の上階からも、まわる風車をはっきりと確認することができる。

(株)グリーンパワー阿蘇の風力発電機、火の国熊本を風で支える。  
共同出資事業が軌道にのれば、新産業も夢じゃない。







緑の中にある熊本県庁

「とても精悍な眺めです。西原村からは、観光資源として村の経済に大きく貢献しているという報告を受けています」（松尾さん）

阿蘇山の緑に映える巨大な三枚羽の風車は、熊本県の“風景”となりつつある。同じ阿蘇郡の小国町にある国内初の国立公園（阿蘇くじゅう国立公園）内大規模風力発電として知られる「目山風力発電所（1700kw×5基）でも、「おぐに自然学校“風の分校”」を開校し、子どもたちの体験型環境学習の場として地域の活性化に一役買っている。

また、熊本県で風力発電とともに期待されるのが太陽光発電だ。

「県内における一般住宅用の太陽光発電システム設置率は、平成17年度末現在、佐賀県、宮崎県について全国第3位です。県では昨年11月に「熊本ソーラー産業振興戦略」を策定し、平成17年度末の現状で約1万件の個人住宅設置件数を平成22年度に倍増させる計画です」（松尾さん）

たしかに博多から熊本へ向かうJRの車窓からも、屋根にソーラーを設置した民家が目立った。それも新築住宅でなく、築十数年以上は経過したと思われる民家が多く、地域性を物語っている印象を受けた。ちなみに各県庁所在地の年間日照時間を調査した平成17年度データによると、熊本は全国第11位で、佐賀県は16位、宮崎は8位の結果だ。

バイオマス、風力、太陽光、熊本県の新エネルギーは、気候風土を見極めたキャンパスの上に描かれようとしている。そして、そのプロセスで町づくりや人づくりといった、新たな地域の財産が生まれつつあるようだ。

バイオマスの環を  
広げよう  
藤本正浩

● へじもと まさひろ 1960年熊本県生まれ。83年に熊本県庁入庁。生活保護ケースワーカーを皮切りに商工、土木、情報企画、総務等様々な分野の業務に従事。06年4月から現職。

実は資源！ バイオマス

吉田一浩

● よしだ かずひろ 1968年熊本県生まれ。95年に熊本県庁入庁。農政、障害者福祉、税務を経て05から環境政策課に配属。今年度からバイオマス利活用に関する周知啓発業務を担当。

新工事で温暖化防止！

松尾久則

● まつお ひさのり 1969年熊本県生まれ。89年に現在の天草市に入庁。07年から熊本県へ出向し、新エネルギーを担当

● 熊本県のホームページ

<http://www.pref.kumamoto.jp/>

県庁所在地／〒862-8570 熊本市水前寺6丁目-18番1号



●対談

大槻 眞一 VS

森 建司

阪南大学 学長

循環型社会システム研究所 代表

〈行政・企業・市民の環境意識を探る〉

*With the company matching sustainable society*

# 持続可能な社会に マッチングする企業とは— 「働く人」と「地域」が主役に

理工系大学とのハードを中心とした連携から、市場への流通までを見据えたソフトの連携へ。「産官学連携」の新たな一翼として、『知識循環』の推進に取り組む阪南大学の大槻眞一学長は、長年にわたり中小企業支援に携わってきた人物です。持続可能な社会に向けて、時代の流れとマッチングする企業は、人的、組織的にどのようなソフトを擁するべきなのでしょう。森代表がお話をうかがいました。

■阪南大学サテライト(中小企業ベンチャー支援センター)／  
大阪市中央区

■2007年9月25日

## 「近江商人」や「琵琶湖」を テキストに書き進められた 滋賀県の産業

**森** 大槻先生は92年から5年間、滋賀県工業技術センターの所長を務められ、県内の中小企業の育成にご尽力くださいました。今日は来たるべき持続可能な社会の中で、「活きる」企業像について、お話をうかがえればと思っております。

**大槻** 私が滋賀県に赴任中、特に心ひかれたのは、近江商人の存在です。「三方よし」の理念は、今も滋賀県の数多くの企業で活かされていますね。非常にユニークな歴史を擁する地域だと思います。私なりに近江商人について勉強してみたのですが、「複式簿記」の原型や「棚卸し」など、近代的な内部管理システムを生み出すとともに、ニシンやボウダラを干物に加工して流通させたことに象徴されるよう、商品開発力という点にも秀でています。とても興味深いですね。

**森** 実にお詳しいですね(笑)。  
**大槻** いえいえ(笑)。そうしたビジネ

スセンスとともに、「三方よし」のよ  
うな思想はどこから来たのだろうと思  
うのですが、一つは配置業で知られる  
日野商人の場合を考えますと、日野の  
周辺には天領(幕府領)が存在しました  
から、その土地から外に出ることの困  
難さが影響しているのではないかと思  
います。同じ配置業で知られる富山商  
人の場合ですと、富山藩が「先触」を諸  
藩に出してくれまして、自分たちの藩  
の商人について、前もって身分の保証  
を頼んでいるんです。ところが天領だ  
とそうはいきませんから、日野商人に  
は身分保証がない。そうなると行商先  
で、ほどほどということをわきまえて  
いないと、つまり荒儲けに走るとです  
ね、土地の人の目に触って『他藩のスバ  
イではないか?』と警告される可能性  
があります。それゆえ、土地の人から信  
用され、尊敬される必要があったので  
はないかと思えます。

**森** 現代の消費者より怖い存在ですね。  
**大槻** 先の「棚卸し」にしても、近江商  
人は自分個人の財産として見るのでな  
く、ご先祖様からの蓄積として、自分の  
商店を見えています。非常に素晴らしい

ことですよ。  
**森** 私も滋賀県で企業を営む者として、  
その理念や志の高さを見習うべきと思  
っています。それと、近江商人には浄  
土真宗の門徒が多く、近江商人の活躍  
によって全国に信者が増加したとい  
話を聞いたことがありますから、商品  
を売るだけでなく、文化を広めたとい  
う側面にも注目すべきだと思ってい  
るんです。

**大槻** 戦前から戦後にかけて、近江八幡  
市を拠点に活躍したW・M・ヴォーリス  
をご存知でしょう。ヴォーリスは三方  
よしの理念に通ずる事業家であったと  
思いますが、『ビジネスとは学校教育や  
医療、伝道活動と同じように社会的奉  
仕活動なのだ』という言葉を書き残し  
ています。また、正確な言葉ではない  
かもしれませんが、『お金儲けのために  
闘うものではない』とも記しています。  
**森** なるほど。私もビジネスとは、人  
間らしさや、人間らしい幸せのために  
あると思っています。ところが今の経  
済社会では、特に大企業ほど顕著だと  
思うのですが、人間らしさが企業に飲  
み込まれているのではないのでしょうか。

持続可能な社会というのは、現代社会に対するアンチテーゼでもあると思うのですが、皆が生き残れるような三方よしの経済構造に立ち返るべきではないでしょうか。

**大槻** 持続可能ということを考えた場合、滋賀県で一番大きなウエイトを占めるのは琵琶湖でしょう。滋賀県がかつての農業県から工業県へと変遷する中、工業開発や産業発展、人口増加等の現実とともに、琵琶湖の水質問題を常に抱えてきましたね。産業の振興と琵琶湖の水質保全、双方の調和と発展をめざしたのが滋賀県だと思います。私が滋賀県赴任中、ちょうどISO14000について、ジュネーブのISO本部で検討中とのニュースを耳にしました。それで滋賀県は環境立県を標榜しているのだから、ぜひ取得する必要があると思います、それならば滋賀県の産業構造を反映した機関である私どもの工業技術センターが、真っ先に取得しようとなったんです。しかも、コンサルタントには頼らず、自力で取得すれば、県内の企業から相談を受けたとき、コンサルタントを紹介するだけの対応で

済まさなくてもいいわけです。当時、センター内で勉強会をして、それで中小企業との勉強会にのぞんど、随分時間はかかりましたが、その甲斐あって98年3月に、県機関としては先駆的にISO14001を取得しました。（※行政機関としては、同年1月に全国初で千葉県白井市が認証取得）

各都道府県内で製造業1000事業所当たり、ISO14001を認証取得した事業所の割合は、98年度からは03年度まで滋賀県が全国第1位です。つまり企業や産業の発展と、守るべきものは守るということとは両立するんです。きちんと考えていけば、できないことではないんです。

## 企業のCSRのガイドライン 「ISO26000」を 中小企業から

**森** 琵琶湖周辺の企業は、環境規制など立地条件が厳しいと言えるのですが、しかしISO14001認証取得の先進県であると。それは「企業の誇り」であり、日本の経営の中心的なものだっ



「人間を幸せにする企業経営とは？」森氏

たと思うんですよ。しかしそれが、グローバル経済下では「誇り」にすぎなくても国際競争に勝てないと、どんどん切捨てられてしまいます。

**大槻** 国際競争をする上で、自分たちの文化や伝統を切捨てる傾向は、日本だけではありません。しかし、世界的なこの流れに対して、09年に「ISO26000」が発効される予定です。

**森** 26000というところ、何を規格化するのですか。

**大槻** CSR（社会的責任）です。企業の在り方を規定し、こういうふうな企業活動をしなさいよ、という奨励ですね。9000、14000シリーズのよ



「中小企業が社会貢献を支えているのですよ」大槻氏

うな認証スタイルとは違い、一種のガイドラインです。企業のあるべき姿といっても、お国柄で考え方も異なりますから、具体化するのには非常に困難であろうと思いますが、既に決定済みの項目もいくつかあります。例えば新商品の開発について、より安全でより安心な商品をつくる熱意を示すこと。従来のように使い勝手や、使い捨てなどの簡便性だけを考えればいいということではないのです。他には社会貢献について、教育や文化など地域の振興に企業がどう関与しているかということも評価されます。

**森** 大企業に有利に働くということはありませんか。

**大槻** いいえ。中小企業だと社会貢献なんて、そんな余裕ないよと思われるかもしれませんが、実際、中小企業は社会貢献しているんです。例えば中小企業のトップが、地域の大学でボランティア講義を行ったり、また、学生をインターンシップで受け入れたり、教育分野に大きな貢献を果たしているんです。ビジネスの現場に学生を受け入れるのは大変なことですよ。当然、ご迷惑をおかけしますからね。そういうことをISOで評価しようということなんです。



阪南大学キャンパス(大阪府松原市)

**森** なるほど。しかしながら、今の経済学では最大利潤の追求ということを学びますね。東京のある企業で私が講演した際、近江商人について話したところ、講演後に質問されました。「利益を追求しすぎるなどという近江商人の商売は、経済ではないのではないか？ 一種のボランティア活動、もしくは宗教活動の色合いが濃いのではないか」と言うんです。確かに机上で経済学を学んだ人間は、そう考えるかもしれないですね。しかし、現場で商売を学んだ人間にとって、利潤のみを追及し過ぎるなどという理屈は至極当然のことなんです。ですから、それを自分の会社でも活かせるのが中小企業の良い点だと思います。これからは物づくりにしても、近代工業の考え方で持続できないでしょう。まさに「ほどほど」の物づくりであり、それにマッチングするのは中小企業だと私は思っています。持続可能な社会は中小企業の独壇場だと申し上げているのですが（笑）。

**大槻** 私も同感です。逆にそうならなければ、地域が成り立たないと思います。森さんが受けられた質問のように、

近代的な経済学と違うじゃないかという意見もあるでしょうが、ISO26000の発効からも見えてくるように、経済はこれまでの切捨て型とは正反対の方向に流れようとしています。企業の社会的貢献や社員の労働条件等、それらの要素を重んじる傾向に変化しつつあるんです。

### 「企業理念」や「地域社会との連携」がキラリと光る社会へ

**森** 先生にそう言っていただけるのは心強い限りです。お金儲けから人の幸せに、働くことの価値観や目的が変わっていかなければ、これからの若い世代に希望が見えてこない。

**大槻** その通りだと思います。阪南大学でも3、4年前から、大阪府の中小企業同友会から寄附講座を頂戴しています。これは多業種の中小企業の経営者の方から、中小企業が地域の主役であり、大企業ばかりが経済の主体ではないことを、リレー式で講義していただくんです。「企業活動は儲かりさえ

すれば良いのではない。我が社にはこういう企業理念があり、地域社会と連携を図り、我々が活躍することで、地域社会が成り立つ」といった内容を、実際の経営者の方から話していただくと、学生は興味をもって真剣に聞き入ります。説得力が違うんですね。そして嬉しいことに同様の講座が、あちこちの大学に広がっているんです。

**森** 若い人たちも、今までのように一流の大学、一流の企業という流れが、必ずしも理想的ではないことに気づき始めたのでしょうかね。

**大槻** そうです。これは意識的に取り組まないと駄目だと思います。我が子には一流の大学、企業へと歩ませて、それで子育ては終わりという社会通念がありますから。そうではなくて、中小企業に光り輝くものがある。世の中、特に地域は中小企業を求めている。そういうことを知ると、就職先に中小企業の選択肢が無い学生も『おや？』と気づくんです。たとえその学生が、中小企業には進まず、公務員になったとしても、人の親になった時、中小企業もいいよと、そう言えると思うんです。

これがやはり社会通念を変える大事な仕事だと思えます。ですから中小企業の経営者は、いろいろな社会的責任を果たすと同時に、それを自覚的に経営理念として事業活動を行う。あとに続く学生に、

『中小企業に  
来たれ』と言  
える時代を築  
かなければと  
思いますね。

森 地域で汗  
をかいて、地  
域を守って、い  
く人が尊敬さ  
れる世の中で  
すね。かねて  
から私も、そ  
ういった世の  
中を望んでい  
るんですよ。  
今日はどうも  
ありがとうございます。  
大槻先生には、  
滋賀県を第二



阪南大学サテライト前でガッチリ握手

の故郷とお願いいただいて、これからも  
ご指導いただけますようお願いいたし  
ます。

## 大槻真一

●おおつき しんいち 1935年、神戸市生まれ。神戸大学理学部卒業。1959年工業技術院大阪工業技術試験所通産技官に。1989年佐賀県窯業試験場長、1991年工業技術院大阪工業技術試験所新材料技術センター所長を経て、1992年滋賀県工業技術センター所長。1997年阪南大学教授となり、2003年同大学学長に就任。大阪、兵庫、滋賀の中小企業家同友会顧問、研究技術計画学会関西支部監査役としても活躍。

勇気凛々

いの壁を打ち破れ

## 森 建司

●もり けんじ 1936年、滋賀生まれ。滋賀県立長浜北高校卒業。新江州(株)代表取締役会長。滋賀経済同友会特別幹事、滋賀経済産業協会副会長など著書「吃音はなわる」遊タイム出版、「循環型社会入門」新風舎

# 持続可能社会2種 「どちらを選ぶ？」

内藤 正明

いまや世界中が「持続可能社会」なるものを模索している。そこで我々は昨年、「持続可能社会の実現に向けた滋賀シナリオ」を提案した。これが自治体レベルでは、日本初の提案として各方面の関心と呼び、国の「環境立国戦略」にも取り上げられ、さらにエイモリー・ロビンスの講演に引用されるなど広く知られるようになった。滋賀県ではいま持続可能な社会の構築が県政の重要課題として、その実現に向けて議論がなされているが、知事からは難しい計画作りと同時に、その具体的な姿を県民一人一人がイメージできるような工夫を期待されているので、我々の研究グループはここ数ヶ月そのための試みを続けてきた。ここに紹介するのはまだ検討途中のものであるが、今後の作業の参考に多くのご意見を得たいと思い、あえてこの段階で公表する。

持続可能社会の大前提は二酸化炭素排出量の大幅削減であるが、滋賀ではその目標を50%としている。そのような目標に到達する社会の姿として、先日の新聞にも国の研究所が技術志向の「シナリオA」と自然志向の「シナリオB」という二つを示した、と書かれていた。本稿でも、二つの社会像を対比的に定義している。一つは、国が先導するような大規模な先端技術に支えられる「高度技術型社会」であり、もう一つは、自然の生産力を活用した小規模の適正技術を振興する「自然共生型社会」である。

さて、このような対極的な社会の姿について、滋賀県民はどちらをより好まれるだろうか。以降に示す社会の特徴を絵図で見ながら考えてみてください。



## 社会全体のイメージ

- ・ 自然の力、人々の力による問題解決
- ・ ゆとり重視の社会、もったいない
- ・ 地域内で生活がこと足りるコンパクトな町
- ・ コミュニティを大事に
- ・ 伝統的、文化的な新しい社会の創造
- ・ 地域の自立、自律



図:今川朱美)

自然共生型社会

社会全体のイメージ

高度技術型社会

- ・ 高度な技術による問題解決
- ・ 効率重視の社会、経済成長
- ・ 大都市を中心とし、各地に広がる生活圏
- ・ 個人を大事により便利、より快適な新しい社会の創造
- ・ 広域化、グローバル化



図:国立環境研究所)

住居のありかた

- ・ 滋賀の伝統的なデザインを基に自然を活かす工夫を取り入れた、長寿命の家が建てられる
- ・ 地元工務店による県産材を用いた住宅が主となる
- ・ 土地家屋の使用権、居住権が家主に与えられる



(図:今川朱美)

家庭での暮らしかた

- ・ 三世代同居やルームシェア、コレクティブハウスなど、多様な形で一緒に暮らす家が増える
- ・ 家族だけのスペースと共有スペースが併設された住居で暮らしている



(図:今川朱美)

- ・ 高断熱高気密、空調を完備し省エネ、快適、安全性が追及され、個人的なデザインの家が建ち並ぶ
- ・ 大手住宅会社による、丈夫な新素材や輸入木材を用いた安価な住宅が供給される
- ・ 土地家屋は高い価値を持ち、財産として所有される



(図:国立環境研究所)

- ・ 核家族化や独り暮らし世帯の増加が進み、一世帯当たりの平均人数は1.2人程度になる
- ・ 家族の間、家族の中でプライバシーがまもられた住居で暮らしている



## 食生活

- ・ 家族同士、学校や地域の仲間同士などでの手作りの食事が主になる
- ・ 規則正しい時間帯に、みんなで食卓を囲んで一緒に食べる
- ・ 地元農家や家庭菜園でとれた食材が中心
- ・ 季節ごとに、旬の食材を使ったものを食べる
- ・ 店頭では主に、自分で調理するための食材が並んでいる
- ・ 食品の生産者、販売者ともに地元の人であり、地域のコミュニケーションを通じて安心が保証されている



(図:今川朱美)

## 日々の消費

- ・ 高価であっても高品質長寿命の製品が選ばれ、リサイクル、リユース品も流通する
- ・ 家の近くにある商店街での買い物主流となる
- ・ 酒屋の御用聞きに代表されるような、地元商店による配達が復活する
- ・ 使用頻度の少ないもの、一時期しか使わないものはレンタルやリースで調達する
- ・ 地場産の新鮮な産物を扱う朝市、夕市ができる



(図:今川朱美)

- ・ 質はそこそこだが安く売られている製品が選ばれ、常に最新の商品が流通している
- ・ 郊外型の大型スーパー、量販店での買い物主流となる
- ・ 家にいながらにして端末から注文することもでき、自宅まで商品が配達される
- ・ 生活に必要なあらゆるものが、各家庭に買いそろえられている
- ・ 遠方の産物も産地直送の新鮮な状態で買うことができる
- ・ 弁当、総菜などの既成食やレストラン、ファミレスなどで食事を簡単に済ませられる
- ・ 生活スタイルが多様化しており、家族がそれぞれ都合の良い時間に食事をする
- ・ 世界各地から輸入された食材が中心となる
- ・ 一年中、季節を問わず好きなものを食べる
- ・ 店頭では主に、調理済みの加工食品が売られている
- ・ 店頭の食品は電子タグで流通履歴が情報管理されており、安心が保証されている



仕事

- ・ ゆとりの多い勤務時間でそこそこの収入
- ・ ワークシェアリングで多様な仕事、多様な就業スタイル
- ・ 家族、地域内で受け継がれるような仕事が増える
- ・ 地域へのボランティア的な活動や、手作り、工芸、芸術、文化などと一体化した仕事
- ・ ワーカーズコレクティブ（協働事業）や農村回帰などにより一次産業が再活性化
- ・ 地域密着型の企業が活躍する
- ・ 地域に根付いた活動の担い手として子をもつ女性や高齢者、障害者の働く場が増える
- ・ 職場が自宅の近くにあり、ちょっとした用事でも気軽に行き来できる



(図：今川朱美)

家事

- ・ 家事は家族が皆で分担、協力して行う



(図：今川朱美)

- ・ 高齢者雇用、労働集約性の向上、就業時間の増加などで高い所得を得る
- ・ 高度な専門性を要する技術職・技能職
- ・ 土地、地域に縛られないような職種、就業形態が増える
- ・ 個人の能力、成果に見合った報酬制度
- ・ 一次から二次、さらに三次産業へのシフトが進む
- ・ 企業再編により大企業が活躍する
- ・ ロボットの普及、IT技術の普及により子をもつ女性や高齢者、障害者の働く場が増える
- ・ 情報ネットワークが整備され、職場は遠くても自宅で仕事することが可能となる



- ・ 食器洗浄乾燥機、掃除ロボットなどの普及により省力化が進む

## 琵琶湖とのかかわり

- ・ 地元の人々の憩いの場、生活の場、交通の場として利用される
- ・ 湖上は交通、物流のために船が行き交い、湖岸は生物の観察、学習の場となる
- ・ 近江八景のような伝統的な風景が再生され、滋賀の歴史、文化、伝統を伝える
- ・ 毛ココやフナなど、琵琶湖独自の水産資源を得られる



(図:今川朱美)

## 余暇

- ・ 家族や仲間同士で共通の趣味を楽しむ
- ・ 家庭菜園やボランテニアなど趣味と実益、社会奉仕を兼ねた余暇
- ・ 釣り、キャンプ、里山散策など自然の中で過ごす
- ・ 地元の祭りなどに参加することで地域の文化を楽しむ



(図:今川朱美)

- ・ 日本を代表する湖として、県内より多くの人々が訪れる
- ・ 湖上には観光船が走り、湖岸は公園や道路が整備されレジャーの場となる
- ・ 琵琶湖を広く見渡せるマンション・料亭・ホテルなどの施設が湖畔に建ち並ぶ
- ・ 観光客の訪問、商業施設の活性化により大きな経済効果が生まれる



- ・ ひとりひとりが自分の趣味を楽しむ
- ・ 旅行、ショッピングなど娯楽に富んだ余暇を過ごす
- ・ ゲームセンター、遊園地など都市型のレジャー施設で過ごす
- ・ 国内観光地、海外旅行などに行き
- ・ 国内外の様々な文化を楽しむ



## 土地利用

- ・市街地はコンパクトな集中効率型、郊外や里山では住民で維持管理可能な小規模のインフラが各地に分散整備される
- ・都心部はコンパクトにまとめ、住宅、職場、学校、商店などが近い範囲内にまとまる
- ・農村回帰の流れで農村が活性化し、都市との間で人とモノの連携、循環が形成される
- ・自転車や徒歩で十分な規模の生活圏でコミュニティが形成される
- ・市街地の車を制限することで緑地が増え、街路が子供の遊び場や交流の場となる



(図:今川朱美)

- ・近畿二府四県にまたがる大都市圏が形成され、県内各地にインフラが行き渡る
- ・都市近郊を中心としてマンションや住宅地が整備され、郊外型の大型商業施設が増える
- ・農村部では企業の参入などにより、大規模な農業経営が主流になる
- ・車の走りやすい道路網が整備され、日常生活の行動範囲が広がる
- ・郊外を中心に、子供達が遊ぶための公園やレジャー施設が建てられる



自然共生型社会

地域基盤

高度技術型社会

## 水

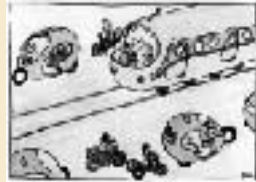
- ・ 自然の植物、微生物の力で排水を小規模で処理する仕組みが各地に普及する
- ・ 用途に合わせて水を繰り返し使う仕組みが地域内に形成される(川端など)
- ・ 飲み水として地域の水が用いられる
- ・ 家庭からのし尿などは、回収して近隣の農地に肥料として利用される



(図:今川朱美)

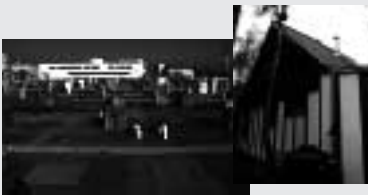
## 交通・物流

- ・ 自転車のようなエネルギーを消費しない移動手段が広く普及する
- ・ 市街地には自転車道が整備され、船、バス、電車にも自転車を積み込んでスムーズに移動できる
- ・ カーシェアリング、乗り合いタクシー、コミュニティバスなど多人数で利用する交通手段が主に
- ・ 地産地消、都市のコンパクト化により地域間の輸送量が減少、鉄道が主な手段となる
- ・ 災害時には県内の舟運などが活躍する
- ・ 自動車の交通量が大きく減少するのに伴い、交通事故も減少する



(図:今川朱美)

- ・ ほぼ100%の家庭、事業所で下水道が普及し、超高度技術により集中的に処理される
- ・ 下水処理した水を再利用する“中水道”が普及する
- ・ 飲み水として、ミネラルウォーターがより一層普及する
- ・ デイスボーズ(生ごみを細かく刻み下水に流す装置)が普及し、ごみ回収の手間が減る



- ・ ハイブリッド自動車、電気自動車など大幅に低燃費化した自動車が広く普及する
- ・ 県内バイパスや有料道路が効率的に整備され、自動車によるスムーズな移動が可能になる
- ・ 自動車が一人体に近い割合で所有され、これまで以上に住民の足として活躍する
- ・ 新幹線などを利用した大規模な高速物流網が整備される
- ・ 災害時には他府県を繋ぐ道路ネットワークが活躍する
- ・ 交通の円滑化、自動運転システムなどにより交通事故を未然に防ぐ



## エネルギー

- ・ 家庭や職場での省エネ意識の高まり、生活の工夫などによりエネルギー消費量が大幅に減少する
- ・ 水力、風力、バイオマスなど自然エネルギー、再生可能エネルギーが小規模な形で各地に分散する
- ・ 薪ストーブや囲炉裏、電気を使わない冷蔵庫など、地域にある資源、自然の仕組みを生かした製品が開発、普及する
- ・ 自然の仕組みを活かした機器の購入を促すために補助金や低利融資が活用される



## ゴミ処理

- ・ 無駄な消費が減り、ごみの発生量（特に有害物質を含むもの）が大幅に減少する
- ・ 製品はあらかじめ簡単に再生利用が可能な素材、デザインで作られており、地域内で小規模なリサイクルの環を形成

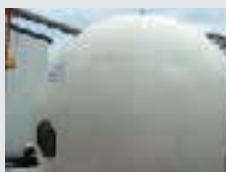


(図:今川朱美)

## 自然共生型社会

## 高度技術型社会

- ・ 大規模に回収し、溶融処理する仕組みが広まり、埋立処分量が大幅に減少する
- ・ 不用製品や使用済み製品を原材料に還元する（逆工場）が建設され、大規模な物質循環が実現する
- ・ 原子力発電、水素燃料、人工光合成、宇宙太陽光発電などによりクリーン化されたエネルギーを大規模に生産、供給する
- ・ 太陽光、水力、大型風力、バイオマスなど自然エネルギー、再生可能エネルギーを大規模に供給
- ・ 最新技術による高効率の家電製品、空調機器、給湯器などが各家庭に普及している
- ・ 高効率省エネ機器の購入を促すために補助金や低利融資が活用される





## 技術と製造業

- ・ 地域の力で事足りる「適正技術」が地場産業として創成される（県産材利用、バイオ燃料、小型風車、帆船づくりなど）
- ・ 高品質適量生産、注文生産
- ・ 地域内でのリユース、リサイクル事業が発達し、譲りたい人と欲しい人をつなぐネットワークが構築される
- ・ 施設集約型から労働集約型になり、多くの地域雇用が生み出される
- ・ 熟練した匠が活躍している

## 街並み景観

- ・ 伝統的な様式に現代的な工夫が組み込まれた新しい滋賀固有の町並みを形成
- ・ 容積率や高さが各地の地域協定で厳しく決まっている
- ・ 広告、看板などは景観を害さないようなデザインに統一
- ・ 風や日射などの自然な流れを阻害しないように配慮して街並みが整備されている



## 産業

- ・ IT、バイオ、家電など様々な分野の先端技術が発展し、高機能な新製品が次々と生み出される
- ・ 安定供給可能な生産ライン
- ・ 再資源化技術が進歩し、それらを集積したリサイクル工業団地（エコタウン）が各地で操業している
- ・ 製造業は一層の大規模化により高度な技術と大きな設備、資本を有する
- ・ 高性能な製造ロボットが活躍している

- ・ 琵琶湖など周辺の風景を見渡せるマンションが建ち並び、先端的な街並みを形成
- ・ 容積率、高さ制限が緩和され、駅前などでは高層ビル群が集積する
- ・ 様々な趣向を凝らしたデザインの店舗が建ち並び、ヒートアイランドを緩和するため、ビルの屋上や周辺に緑地や水辺が整備されている



## 自然共生型社会

- ・ 農業を志す意識が高まり、家族やコミュニティによる自立的な営農が広まる
- ・ 有機、循環農業で人の協働や畜力を中心になる
- ・ 地元で作られた季節ごとの旬の作物が消費されている
- ・ 企業、団地、家庭、学校、刑務所、観光農園などで多様な目的（福祉、憩い、教育、更生、レジャーなど）に農地が活用される



## 水産業

- ・ 自然湖岸を再生することで生態系が回復、琵琶湖の伝統的な漁法によって固有種を保全しつつ漁獲量が増加する

## 林業

- ・ 生き物のすみか、憩いの場、生産の場として森林の価値が評価、維持保全される
- ・ 地域の自然生態系に即した樹林が育てられている
- ・ 地域や外部のボランティアな力も参加した里山の維持管理



(図・今川朱美)

## 高度技術型社会

- ・ 企業の農業参入になどによる大規模な営農形態が主流になる
- ・ バイオ技術を駆使した植物工場型の大規模生産で省力化、品質管理が徹底される
- ・ 季節を問わずあらゆる作物が栽培、収穫可能となる
- ・ 大規模効率的な生産、出荷体制が確立されることで農業生産額が大幅に上昇、雇用も創出され、農地は重要な産業拠点として位置づけられる

- ・ 琵琶湖水環境の回復、外来種対策などによって固有種の漁獲量が増加し、養殖も盛んに行われる

- ・ 二酸化炭素吸収源として森林の価値が評価、維持保全される
- ・ 経済性の高い樹種を植林することで高い林業収益を得る
- ・ 高性能林業機械を活用した大規模集中型の維持管理



## 税・制度

- ・グリーン税、炭素税など環境負荷に応じた課税がなされ、環境に配慮した地域づくりのための財源となる
- ・景観など琵琶湖の環境利用に対する課税が取り入れられる
- ・排出権チケットが配布され、個人レベルでの排出権取引が行われる
- ・特区などによるエコ地域社会モデルの実現
- ・県産材住宅への優遇措置（木材の一部無償提供等）

## 経済

- ・経済規模は縮小しているが、地域内での取引は活性化し地域通貨などが流通する

## サービス業

- ・環境に配慮しながら欲しい商品、欲しい量を見極めて買うスタイルが一般的になる
- ・娯楽に関するサービス需要の多くが地域内で満たされる（散策、釣り、家庭菜園、炭焼き、陶芸など）
- ・福祉（介護など高齢者サービス）が地域の人々の非市場的な協働でなされる
- ・レンタル、リース、共同利用など製品のサービス化が進む
- ・要望にあつた物をDIY（自分の手で作ること）で自作し、工房の提供などそれを手助けする形のビジネスが登場する

## 経済・法制度

- ・消費者は多種多様な商品の中から欲しいものを自由に購入することができる
- ・娯楽に関するサービス需要の多くが外部で満たされる（大型レジャー施設、温泉、海外旅行など）
- ・福祉（介護など高齢者サービス）がビジネス市場として大きく成長、参入が相次ぐ
- ・様々な製品のリサイクル率が向上し、再生品の流通が市場で大きなシェアを占める
- ・日常生活のこと細かなケースの要望に対応した、様々なバリエーションの商品が売られている
- ・格差は広がっているが、経済は成長を維持し、現在の約2倍の規模に成長
- ・グリーン税、炭素税など環境負荷に応じた課税がなされ、省エネ型の住宅、機器、車などを導入促進するための財源となる
- ・琵琶湖湖岸周辺の経済活性化のため税の減免等が取り入れられる
- ・排出権取引市場が拡大し、県内の事業者も活発に国内外間の取引を行っている
- ・特区などによるエコ産業拠点の実現
- ・高性能省エネ住宅への優遇措置（低利融資等）

## 自然共生型社会

## 高度技術型社会

### 行政

- ・ 行政と住民の距離が近い、小回りのきいた行政サービス
- ・ NPOの指定管理、スローな公共事業など行政と県民、事業者の協働が進んでいる
- ・ 適正規模の自律

### 社会

- ・ 自治体再編(市町村合併など)による効率的な地方行政
- ・ 電子業務などを中心として企業へのアウトソーシングが進んでいる
- ・ 大きな地域基盤

### 人間関係

- ・ 人同士のつながりの尊重
- ・ コミュニティ重視
- ・ 地域社会での世代性別をこえた交流が重視され、近所づきあいや町内での集まりなどが活発に行われる

- ・ プライバシーの尊重
- ・ 個人重視
- ・ IT社会での世代性別をこえた交流が重視され、遠く離れた者同士のコミュニケーションが可能となる

### 伝統・文化

- ・ 伝統工芸などの地域文化が、住民の生活の一部として世代間に受け継がれていく
- ・ 祭りなどの年中行事に参加することで、自分の住む地域に存在する文化を、身をもってじかに体験する

- ・ 各地の固有文化が地域の代名詞、観光資源として価値を持ち、条例で保護されている
- ・ バーチャルリアリティ(仮想現実)の普及で、家にいながら世界各地の文化に触れることができる

### 国際交流

- ・ 地域レベルでの技術支援やボランティアなど、非営利活動を中心とした交流が活発に
- ・ 滋賀の文化に惹かれて移り住む人が増える
- ・ 世界に誇る地域文化を持つ

- ・ グローバル規模でのビジネスを中心とした交流が活発に
- ・ 仕事の場として滋賀に移り住む人が増える
- ・ 世界に誇る経済力を持つ

健康・医療

- ・日常生活や仕事の中での運動、自然食などを通じて健康を維持する
- ・予防医学の進展、健康的なライフスタイルで発病を予防する
- ・家族やコミュニティ運営の地域診療所による介護が一般的に
- ・末期医療、緩和ケアの充実、尊厳死

教育

- ・衣食住に必要な技術・知識の体得を目標とした学習
- ・家庭や実社会をフィールドとして、様々な人々から実学としての知恵を学ぶ
- ・地域を知る、学ぶ、楽しむ
- ・礼儀作法やマナー、食の大切さなどが家庭を通じて身につく

子育て

- ・地域の人々による協力的体制が築かれている
- ・父親、兄弟、祖父母など家族全員で子育て
- ・町内ごとの保育施設設置、地域のお年寄りの力を借り、働きながらの子育てが楽になる

安全・安心

- ・地域住民が自主的に防犯、防災に取り組み
- ・コミュニティ内での人付き合いが地域の安全性を高める

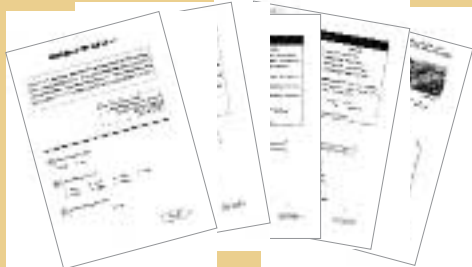
- ・健康食品、サプリメント、フィットネスジムなどを活用することで健康を維持する
- ・診療技術、再生医療、製薬技術の進展により「不治の病」の多くが克服される
- ・健康情報管理端末、介護用ロボット、救急医療情報システムによる介護が一般的に
- ・医療技術の進歩による長寿命化

- ・グローバルな競争社会に適応しうる高度な知識の学習
- ・高等教育機関でのハイレベルな専門家の指導による学習
- ・世界を知る、学ぶ、楽しむ
- ・礼儀作法やマナー、食の大切さなどが学校教育の一環として教えられる

- ・行政が子育てを手厚くサポート
- ・公共、民間の育児支援サービスが母親の負担を軽減
- ・職場（の近く）に24時間保育施設が増え、働きながらの子育てが楽になる

- ・防犯センサー、警報システム、災害予測システムが各町内、各家庭まで広く普及する
- ・信頼性の高い防犯システムが地域の犯罪を未然に防ぐ

## あなたはどちら？



滋賀県琵琶湖環境科学研究センターでは、県民を対象としたアンケートを計画しています。皆さんが希望する未来の社会はどちらに近いでしょうか？ 各自の選択をお聞かせいただければ幸いです。ご意見のある方、ご興味のある方は

琵琶湖環境科学研究センター 総合解析室

〒520-0022 滋賀県大津市柳が崎5-34

TEL 077-526-4802 FAX 077-526-4803

までご連絡ください

## 価値観

- ・この世はすべて次代送り(生命の連鎖、循環)
- ・三方よし

自然共生型社会

価値観

高度技術型社会

- ・成長発展
- ・自己実現

無二物中無尽藏  
有花有月有樓台  
伊藤正明

● ないとう まさあき 119339年大阪府生まれ。1962年京都大学工学部卒業、1969年同工学博士、1974年国立環境研究所主任研究官、1990年同統括研究部長、1995年京都大学工学研究科教授、2002年同大学院地球環境学堂長。

現職／佛教大学社会学部教授、琵琶湖環境科学研究センター長、京都大学名誉教授、(NPO)循環共生社会システム研究所・代表理事、(NPO)KES環境機構・代表理事、他。

著書／「持続可能な社会システム」、「地球環境と科学技術」岩波講座など。

活動／持続可能社会の理念と実現方法に向けた研究およびその実践活動。

# ふれあい

## 第八回

『みんなちがってみんないい』

中井 二三雄



交通事故で入院していた、クラス  
一元気な山元君が退院してきました。  
さらに元気さパワー・アップです。  
担任の田附先生から、入院中の感  
想を聞かれた山元君、みんなの前で  
発表することになりました。

「暇なので本をよく読みました。  
特に印象に残ったものを、みんなに  
紹介したいと思います。これは『す  
ずと小鳥とそれからわたし』とつづ、  
童謡歌人・金子みすゞの歌です」

わたしが両手をひろげても  
お空はちっともとべないが  
とべる小鳥はわたしのよう  
地面しんぺんをはやくは走れない  
わたしがからだをゆずっても  
きれいな音はでないけど  
あの鳴るすずはわたしのよう  
に  
たくさんのうたは知らないよ  
すずと 小鳥と それからわたし  
みんなちがって みんないい  
先生は、山元君のやさしさと成長  
ぶりに感心しました。  
もちろん、クラスの全員も同じ気  
持でした。

中井二三雄

●なかい ふみお 1949年、守山市生まれ。  
れ。広告・出版・映像関係の仕事を経て、1  
976年から著述業。滋賀県文化振興事業  
団発行「湖国と文化」編集長。大津市在住。

An environmental economic idea

環境経済論こぼれ話～

# 隣のお庭の 「循環型経済」



花田 真理子

大阪産業大学 人間環境研究所 准教授

おや、お隣の耕ちゃん、お帰り。今日は早いね。

なんだか可愛らしい植木鉢を持って来ないか。どれどれ、へえ、こりやしやれてるね。ええつ、紙を再生して作ったポットだって？ 種を播いて、少し大きくなったら、ポットごと庭やプランターに植えればポットは土に還るんだって？ なるほど、原料は使い終わった紙だし、ゴミにもならない、そのうえ植え替えの手間も要らない：こりやあ便利で、地球にやさしい植木鉢だね。



おじさんの庭にもおもしろい鉢があるねって、耕ちゃん、よく気がついたねえ。この鉢は、おじさんの手作りさ。





皿は「燃えないごみ」として埋め立てているけれど、その埋め立て場所もだんだん残り少なくなってきたらしい。だから、壊れたお皿を砕い

コンクリートの余りをちょっと混ぜて粘土みたいにしたものを、水と混ぜて好きな形に作れるんだ。水はけもいいし、コンクリートと違って中性だし、最後には粉々に砕いて土に還すことができるんだ。

こっちの鉢は、普通の陶磁器みたいだけど、それがちがうのさ。なんと、割れた茶碗やお皿を20%も混ぜて作られた、いわば再生陶磁器だ。実は陶器の原料にできる土もだんだん少なくなってきたのさ。それに、壊れたお

て、またお皿の原料として使うというのは、材料となる資源も使わなくてすむし、ゴミも減らすことができるので、すごく大切なことなんだ。資源使用やゴミの排出をなるべく少なくするために、他の人に使ってもらう、他のものの資源として利用する…こっしり今まで行きっ放したったモノの流れが、もう一度ぐるりと元に戻るのが「循環型経済」だよ。

昔は、どんなものでも捨てないで、何かに使っていたぞうだよ。壊れた道具なんかでも、小さな曲がった釘一本すら捨てることなく、別の用途に役立てて使い続けたぞうだ。いよいよ使えなくなったらかまどの焚きつけにするんだけど、その後残ったかまどの灰まで「灰買い」という人が集めて回り、それを売り買いする灰市が各地にあったぞうだよ。灰は肥料や洗剤として使われるほかに、染色、製紙、お酒造りにまで使っていたというから驚きたね。トイレも昔はもちろん水洗なんかじゃないから、ちゃんとウンチを汲み取って、畑の肥料にしたぞうだ。それが

結構いい値段で売れたから、長屋の大家さんの大切な収入だったぞうだよ。おじさんも小さい頃、家に汲み取りに来た人が大根を置いていってくれたことを覚えてる。その大根を食べて、お手洗いに行つて、それが肥料になって、また立派な大根になる…人間と植物はしっかり助け合っていたんだね。これが「お互い様」の関係だ。「お互い様」って、つくづく謙虚な言葉だね。尊重しあう響きを感じられるじゃないか。どんなものも丁寧に、最後まで使い尽くす…これが相手への敬意の表れでもんだ。

それが今はどうだ、外で雨に降られたら500円の傘を買う。安いしその時だけ濡れなければいいというわけで、雨上がりの街角にはビニール傘が打ち捨てられて、見向きもされない。昔は傘の修理をしてくれるお店まであったんだよ。それはそれは上手に直してくれたものだった。それだけモノを大切に使っていたんだよね。

考えてみれば、ゴミを出す生活をしているのは人間だけだ。植物は偉いよ。

草や木は、芽が出て一生懸命成長しながら酸素を出してくれて、枯れた後も土の中の微生物に分解されて、栄養分になる。これがいわば自然の大きな循環システムだ。しかも耕ちゃんみたいに若い木は、特にぐんぐん成長するだろう。だからたくさん二酸化炭素を吸って酸素を吐き出してくれる。恩にも着せず、黙々とほかの生物のお役にたってるってんだから、実に偉いもんだね。

耕ちゃんもおじさんも人間だけど、動物の一種だよ。動物は、草花や木などの植物や動物を食べ、酸素を吸って二酸化炭素を吐き出す。動物も植物も、命あるものはいつか死ぬが、死んだ後は自然に還って、ほかの生き物や後世の生き物の栄養になる。どうたい、支え合っているだろう。それなのに、どうも人間だけが自然に学ぶ謙虚さを忘れちゃったみたいだね。

たかが動物の一種類に過ぎない人間が、勝手に木を伐り倒し、資源を使いまくって、二酸化炭素やゴミをどんどん自然の中に出していく。自然だって、こんなにたくさんのゴミを出されちゃ、

処理しきれない。しかも、自然は自分から生まれた天然素材以外の、特に「化学ごみ」の処理が大の苦手だ。その結果、ゴミはどんどんたまって生物が住みにくい世界になっていく。

でもね、ゴミは最初からゴミじゃない。もともとモノだし、その前は資源だったはずだよ。とすれば、ゴミの分だけ資源が減っている、ということにもなるんじゃないかい？

えっ、「資源を取ってきて、ゴミをどんどん作る、そんなこと続けてたら、資源はなくなるし、ゴミはあふれるし、世界はめちゃくちゃになっちゃうじゃない！」って？ 耕ちゃん、スゴいなあ、よく気がついたね。そのとおりだよ。

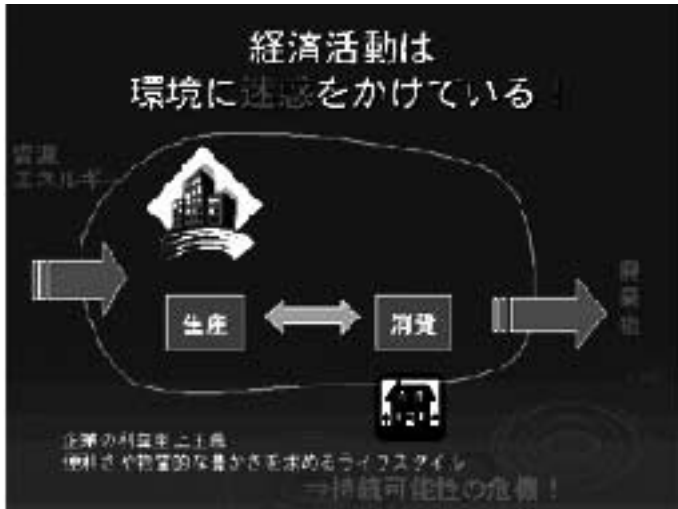
じゃあどうすればいいかって？

そりゃあ、なるべく資源を使わないとか、ゴミを捨てる前にもう一度使うとか、とにかく自然にご迷惑をかけるようにすることが第一。実際に、企業もそこを考えて、資源を使わないですむように、リサイクルしやすいように、と考えながら設計するようになってきた。もう一つは、使う時、買って

時に、「安さ」「便利さ」のほかに、「環境を気を遣っているな」と思えるものを選ぶことだ。耕ちゃんたちが気をつけて買うようになると、企業もますます環境のことを考えて作るようになるからね。そしてなによりも必要以上に欲張らないことだ。

そうやって、人間が自分の身の程をわきまえて、地球に迷惑をかけない程度の暮らし方をしないと、耕ちゃんが言うように、この世界はゴミであふれてしまっ、大変なことになるよ。人間は自分たちが地球のご迷惑ムシだという自覚を持って、買い物や暮らし方に気をつけることが大切だね。

さあ、このスイカの苗をあげよう。土に還るような野菜屑や果物の種なんかを庭に埋めてたら、自然に生えて来るんだが、これもその一本だ。耕ちゃんはその植木鉢で育ててみたらどうだい。えっ、実がなったらおじさんも一緒に食べようって？ 嬉しいねえ。苗をあげて実を分けてもらう、これも「お互い様」だね。じゃあ、自然から来て自然に還るスイカに感謝しながら、一緒に食べるのを楽しみにしているよ。



今回、耕ちゃんとおじさんは、自然界のもつ循環メカニズムや、自然の処理能力を超えて、経済活動が悪影響を与えてしまっている問題について話しています。

資源をどんどん投入し、廃棄物をどんどん排出するような経済活動は、経

済システムの外にある自然システムにものすごく迷惑をかけていますから、このままでは経済それ自体が続いていくことすら危ういことは、自明の理です。にもかかわらず、いまだに経済が大きく成長し続けなければ大変なことになる、と思いきこんでいるのはなぜでしょうか。

その背景には、短期的な利益ばかりを追求する企業と、物質的な豊かさや手軽さ・便利さを求める市民のライフスタイルがあります。経済活動と自然システムとのつながりを考えることのできない人間の傲慢な姿勢があります。

また、今までの経済システムは、市場の価格メカニズム以外の価値は反映できませんから、過剰生産をひきおこし、価格のついていない迷惑行為、例えば自然環境の汚染が助長されることとなります。

私たちは資源の節約と廃棄物の削減をすればいい、と思いがちです。しかし、リサイクル率

を上げよう！とキャンペーンをするよりも、まずはゴミを出さないような暮らし方が大切です。リサイクル素材の小さなエコバッグをさりげなく取り出したエレガントなあなた、あなたこそ21世紀のエコセレブです！

循環型経済の第一歩は、「エネルギーや労力をかけて人間が循環させようとしなければ循環しないもの」を減らすこと。その点、耕ちゃんとおじさんの食べるスイカは、二人が飛ばしつとした種が翌年の芽吹きにつながりますから、大丈夫。たくさん食べてくださいね。

## 花田真理子

●はなだ まりこ 大阪産業大学人間環境学研究所准教授  
〈専攻〉

◎環境経済論（経済と環境の両立可能性に関する実証研究）

◎環境コミュニケーション（各経済主体を環境配慮へ動機づけるための行動科学的研究「お得意しく美しく」）

◎環境教育（プログラム開発・協働による地域づくりの実践）



# 「秋の夜長を楽しむ夕べ」 開催しました。

日 時／平成19年9月29日(土) 13:00～20:30

場 所／森林公園「くつきの森」やまね館 滋賀県高島市朽木麻生443

テーマ／「森と人とのつながり～桃太郎に学ぶロハスな暮らし～」

内 容／Ⅰ部

1、「大地と森、そして命～ダルマとディーブ・エコロジー」＝

朽木學道舎 師家 飯高 転石氏

2、座談会＝内藤正明氏、今森洋輔氏、山口美知子氏、飯高転石師、玉垣勝氏、  
辻村琴美氏

3、京都小川珈琲のバードフレンドリーコーヒーで一服タイム＆コーヒーの入れ方教室

Ⅱ部、山里料理で交流会(地元の料理を使ったお料理バイキング)

Ⅲ部、「秋の夜長を楽しむ夕べ」

高島市民ジャズオーケストラ・ビッグベル、朽木太鼓の野外演奏

司 会／加藤みゆぎ氏

主 催／NPO法人麻生里山センター

協 賛／MOH通信、高島森林体験学校

後 援／高島市

参 加／70名

料 金／Ⅰ・Ⅱ部3,000円 Ⅱ・Ⅲ部3,000円 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ部4,000円(コーヒー・食事つき)



やまね館はココです

散策にぴったり、  
手入れされた小川



## 第.部 基調講演&座談会

テーマ/森と人とのつながり～桃太郎に学ぶロハスな暮らし～

身の回りの小さなエコから、地域の空にトキの舞い飛ぶ日を夢見て、パネリストの方々は熱く語っていただきました。座談会の終わりに小川珈琲の自然栽培コーヒーでチョット一服。



内藤 正明 氏 (琵琶湖環境科学研究センターセンター長)

「役に立たないものにも価値はあります。存在するだけ、あるだけでいいんです」



飯高 転石 氏 (朽木道舎師家)

「今の生活水準を保つ、浅いエコではなく、足ることを知った深いエコロジーを展開する事が大切」





今森 洋輔 氏 (画家)

「今の子どもは虫の絵を描けないんですよ。気持ちが悪いと言って……」



山口 美知子 氏 (滋賀地方自治研究センター理事)

「飯高先生のお話を聴いて、私は今まで行政として何を残そうか、といった考えが、おこったものだとなりました」



海東英和氏 (高島市・市長)

「高島の自然を守り、まちの活性化に取り組む時機が来ました。先生方のご意見と住民の意向を聞きながら、未来の高島を描きたいと思います。皆さんご協力ください」



山口 美知子 氏 (滋賀地方自治研究センター理事)

「飯高先生のお話を聴いて、私は今まで行政として何を残そうか、といった考えが、おこったものだとなりました」



玉垣 勝氏 (NPO法人麻生里山センター代表理事)

「植林とは、よそから苗木をもってきて植えるという、とても不自然なことなんです。かつては地域の一番良い杉を実生から育てていました。」

身の回りの小さなエコから、地域の空にトキの舞い飛ぶ日を夢見て、パネリストの方々は熱く語っていただきました。座談会の終わりに小川珈琲の自然栽培コーヒーでチョット一服。



そう、ゆっくり注いで、いい香り





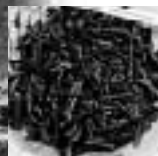
## 第Ⅰ部 山里料理で交流会

素朴でロハスな地元料理に皆さん大満足。

### 【メニュー】

鯖寿司、からしあえ、烏賊と里芋の煮物、焼鯖  
そうめん、ぜんまいの煮物、切干大根、ふかし  
いも、なすの煮物、酢の物、季節のサラダ、と  
ちもち、栗ご飯。

「わあ、美味しそう」思わず笑顔に



「心を込めて  
つくりました」  
睦美会  
山本悦子さん



第」部 朽木太鼓とジャズの競演

- 高島市民によるジャズオーケストラ「ビッグ ベル」の皆さん
- 太鼓の音とかけ声が身体に伝わる







《来年も、お会いしましょう》

太鼓とジャズに酔いしれ、虫たちの奏でる、余韻に浸りながら、家路に着く。やまね館を出ると、淡いともし火が帰路を照らす。よく見ると、ペットボトルの行灯。なんとも幻想的な夜のお散歩でした。

## 参加者の声

- ★ 現代の進歩とは裏腹に不安が付きまとう現在、自分の中で根本が見出せなかった。今日のお話を聴いて、“色即是空”から考えてみよう。くつきを応援します
- ★ くつきの森が、人工的につくられた森になるのではなく、本当の森になる。今回の座談会で見えてきました。子どもたちにも自然の体験を
- ★ “予想外”の展開が良かった
- ★ 地元の人たちのがんばっている姿が見れて良かったです。私もがんばろう。
- ★ ロッジで泊まり、草の名前を教えてくださいました。
- ★ 学生の発表があってもいいな。料理はレシピを
- ★ 教えてください
- ★ 内藤さんの〇年後の環境の話は具体的に良かったです。
- ★ 野菜も料理も優しい味で美味しかった
- ★ 汁物がほしかった
- ★ 知らない人とコーヒータイムで触れ合えた。
- ★ ペットボトルのろうそく良かった
- ★ 野外のジャズはいい。しゃべりも楽しめた。
- ★ 太鼓がかっこよかった
- ★ ほのぼのして良かった
- ★ 森林セラピーが実現するといいな
- ★ 今森さん面白かった
- ★ オーガニックコーヒーは最高
- アンケートより抜粋 —

〈商家の家訓の話 第四回〉

# 矢尾喜兵衛の所感(二)

店主の石門心学修養

*The story of the famiry precepts of the merchar's family*

末永 國紀



秩父で酒造業を営む矢尾家の  
井戸を祭った小祠(秩父市)

四代目矢尾喜兵衛の著した「商主心法 道中独問答寢言」は、嘉永六年（一八五三）に叙述されたものである。体裁は、表題にあるように、四代目が道中の合間に、店主の心構えについての想念を格言風に記したものである。自ら「寢言」と謙遜し、「未夕次第不撰」と断っているように、重複もあり、文章は前後未整理である。すべて一つ書き、すなわち簡条書の形式を採り、全部で三八六力条からなっている。

内容の特徴は、家の永統を念頭に商家の当主の振る舞いに関する事柄が記されていることである。なかでも正直と始末儉約を説き、その反対の奢侈と吝嗇を戒めた簡条には、石田梅岩を創始者とする庶民教学としての石門心学への深い傾倒を窺うことができる。

例えば、以下のような文言である。

「人の物は人のもの、我物は我ものど、かたくする人は諸事不義理なし」、

「奢侈と吝嗇は、表黒白の相違見へて、元同根也、おごる者は必しわし、しわき者は必おごる、これ小人の甚しき也」、「始末儉約して出来たる金子は、身代の大黒柱、但し儉約と簡略と吝嗇と此三ツを弁ふべし」、「人に物を借る事を苦勞に思ひ、何道具物にても曲らざるやう、筋目形りに取置する人は、大直人也、懇意にして益あり」、「ものの捨らざるやう始末よくする事は、小量の癖と思ふは、物種壺弁蒔て壺弁実のり、壺斗は壺斗、壺石は壺石と、蒔種数と実のり数と同し事に思ふ道理也、物の冥加を知らざる心得なり、ただ金儲けさへすればいつ迄も大身代と思ふ時は、二代目より必ず衰微に及ぶもの也」、「正直は大浄清潔白の元手也、邪曲ハ不浄汚穢の元手也」、「始末儉約は、身代の養生、大黒頭巾の下繕ひ」、「世の中にも勅定詰の始末はする人あれと、冥加の為の始末をする人、至つて稀也」

これらは、正直と始末儉約にかかわる事柄を述べている。石門心学では、実践道徳としての根本を正直においている。経済社会は、所有関係と契約関係が尊重されなければ成立しない。そのために、「ありべかかりの正直」、ありのままの正直が最重視されるのである。

石田梅岩は『儉約齐家論』のなかで、「天より生民を降すなれば、万民ことごとく天の子なり。故に人は一箇の小天地なり。小天地ゆへ本私欲なきもの也。このゆへに我物は我物、人の物は人の物。貸たる物はうけとり、借たる物は返し、毛すじほども私なく、ありべかにするは正直なる所也。此直行はるれば、世間一同に和合し、四海の中皆兄弟のごとし。我願ふ所は、人々こゝに至らしめんため也」と述べているように、人々を正直の心に立ち返らせることを眼目に道を説いた。

さらに、正直の心を取り戻すため

には、すべてにわたって貪らずに儉約を身につけることであると説く。儉約は、物の効用を生かし、人を生かすことになるのであり、人に迷惑をかけない、勞させないという意味での正直につながるとした。正直と儉約は、石門心学の経済合理主義の実践項目であった。

右に掲げた四代目喜兵衛の記した正直や始末儉約の文言に、石門心学の色濃い影響がみとれ、喜兵衛が日頃から石門心学によって修養を積んでいたことを知ることができよう。

## 近江商人に学べ 末永國紀

●すえながくとし1943年生れ。  
同志社大学経済学部教授。経済学博士。  
(財)近江商人郷土館館長。  
著書／『近代近江商人経営史論』(有斐閣)、『近江商人』(中公新書)、『近江商人学入門』(サンライズ出版)

# 「人間の学」 (森信三先生著)を読む

Study of “Human nature” written by Professor Shinzo Mori

井上 昌幸



今回から森信三先生著「人間の学」を学んでいきたいと思えます。

森信三先生は神戸大学及び神戸海星女子学院大学教授を歴任された教育者で多くの書物（「修身教授録」他）を執筆されています。

この本は十三才前後の小中学生を対象に書かれています。が、「次代を背負う若人のみならず、すべての成人向け必読の人生指南書」と書かれており、大人も読んで自分の子供や孫だけでなく、多くの人にその内容を紹介する価値があると思います。

第一部「生き方」の基本から大切な箇所を抜粋していきます。

## 一・人生二度なし

○一生で一ばん大事な年頃

あなた方は現在一生のうちで、一ばん大事な年ごろだということ。それは何故かというに、それは十三歳を中心とする前後二、三年という年ごろは、人間が一生の生き方のタネまきをする大事な時期だということです。

これは、何が大切だといっても、これほど大事なことはなかるうと思いません。

○人間としての生

大事なことは、この「人間」としてのわたくしたちの一生は、二度とやり直しの利かぬものだということがあります。

○やり直し利かぬ

わたくしたちの一生は唯一度だけであって、二度とやり直しは利かないのであります。ところが、実際驚くべきことには、多くの人が意外なほど、人生におけるこの最大の問題について、深く考えていないようであります。

○人生二度なし

こうして皆さんの心の中に「人生二度なし」という、この世でいちばん貴重なタネのタネまきをしておきますと、それが皆さん方の心の中でしだいに芽が出て、やがてリッパに成長するに違いないと思うからであります。

森信三先生は1963年に「人生二度なし」（働く青年のための人生論）という 著書を発行されています。この本に書かれている内容を一部抜粋します。

「私の人生観の根本を申しますと、それは『人生二度なし』ということになるわけです。そして私がこのことわかったのは三十五才の時だったので。つまりこの人生というものは、二度とくりかえすことのできないものである。そしてそこからして、二度とない人生だから、できるだけ後悔しないような行き方をしなくちゃいけないという気持ちになり出したわけです。」

中国明時代の書物で「采根譚」さいこんたん（久須本文雄著）と云う本に次のように書かれている。「天地は永遠に存在するものであるが、人間の肉体は、この世に生まれたものの二度

とは生を得ることはできない。人の一生は長くてもわずか百年ほどに過ぎないが、この歳月はまたたく間に過ぎ去ってしまうのである。幸いにこの世に生を得たからには、生まれてきたことの楽しみを知らなければならぬが、しかしまだ、再び得られないこの人生を空しく過ごしてはいけないという心配もいだいて、この人生を意義あらしめるようにしなければならぬ。」

お茶の世界では、有名な「一期一会」という言葉があります。これは今日の出逢いは二度とないので、お客様を一杯もてなそうとする心構えのことのようですよ。

私どもは時間は無限にあるように思い勝ちですが、「今日という日は二度とない」ということを肝に銘じる必要があります。

## 二、まず人間としての軌道に

### ○人生の根本信条

この「人生二度なし」ということは、どんなことよりも大事な人生の根本条件であって、皆さんに、何よりもまず「人間としての軌道」に乗っていただきたいということとあります。ここで「人間としての軌道」といっていいものは何かと申しますと、

その第一は、毎朝親に対してあいさつのできる人間になる  
その第二は、親ごさんから呼ばれたら、必ず「ハイ」という返事ができる

その第三は、

(イ) 席を立ったたら、イスをかならずキチンと中へ入れておく

(ロ) ハキモノを脱いだら、かならず揃える

ということです。

○ 「しつけ」の大切さ

以上お話しした三つの事がらは、ふつうに「しつけ」と呼ばれているものです。「しつけ」と呼ばれるものの中身が、以上お話しした三つのことがらだということを、ほんとうに心得ている人は、あんがい少ないように思うのであります。ですから皆さん方にしても、今日を境にゼヒ実行するようにしてほしいと思います。

一般に5S運動という言葉が使われますが、これは「整理」「整頓」「清掃」「清潔」「躰しつけ」のことで、日常心掛けたい事柄です。更に「習慣」を加えて6S運動と云いますが、何か自分で決めたことを「習慣化して継続すること」が大切です。

岩波文庫に「フランクリン自伝」と云う本があります。ベンジャミン・フランクリンというアメリカの独立運動で貢献した人ですが自分の短所に気づき、節制、沈黙、規律、決断、節約、勤勉、誠実、正義、中庸、清潔、冷静、純潔、謙譲の十三の徳目をすべて自ら習慣として身に付ける努力をして数年ですべてを達成したことが書かれています。

大切なことは、何かのキッカケで「気づき」そして「意識して」「行動する」ことです。まずこれまで説明のあった「三つの事がら」を大人自らが実践してほしいものです。

三、甘え心をふりすてよう

○ 稚心ちしんを去る

このコトバの意味は、子ども臭い甘えごろを断ち切りふりすてるということです。皆さん方の年ごろに、「人生二度なし」という真理が、心の底深くタネまかれるとしたら、それが最初に芽を出すのは、「稚心ちしんを去る」、すなわち「甘え心をふりすてる」ことから思うのであります。

○ 毎朝の起床のこと

・朝、親に起こされないで、自分で起きるということ

自分で目覚ましをかけるか、ラジオをかけてもらう。声で起こされないこと。今、自分がどのような起き方をしているか見直してみよう。

○ 毎日の勉強のこと

・親の方から「勉強をしなさい」などといわれないうちに、ひとりで勉強する人間になる。

○ 兄弟げんかのこと

・「甘え心を断ち切る」ためには、今日限り「兄弟げんか」についても、ひとつ根切りに出来ないものかと思えます。

十三才前後で甘え心をふりすてるには「決心・覚悟」が

大切です。朝起きは自分で目覚ましをかける習慣を身に付けるようにしたいものです。そして朝起きが自立できるようになったら、自分で勉強する時間を決めて、テレビやゲームの誘惑を断ち切ることです。いつも親から云われるよりも自分の意志で行動ができるようになれば、甘え心をなくし積極的な生き方が身につきます。

#### 四、学校のきまりを守る

○学校生活でのあいさつ

・校長先生をはじめ全校の先生方、自分の学級のお友だち、クラス以外の生徒にたいして朝のあいさつをする。

○クツのかかとをそろえる

・「クツ箱にクツを入れる時、すべての人のクツのかかたがキチンと一直線にそろうように入れて下さい。」まず、自分のクラスからはじめて下さい。

○挙手のあり方（先生の質問にたいして手を上げる時）

① まず五本のゆびをキチンとそろえて、真っ直ぐにのばすこと。

② うでを真っ直ぐに上げること。

③ できるだけ速く、すなわち敏速に。

以上ができるようになったら

④ 先生に呼ばれたら、ハッキリ返事ができるようになり、

⑤ 席を立つたら、イスを入れる。

○全校の生徒が一人もローカを走らぬということ

・この「ローカを走らぬ」というきまりは、とくに最近のように交通禍がひどくなった時代には、学校としても、もつとも大事なきまりといつてよいでしょう。

森信三先生は「クツのかかとをそろえる」ことをくり返して述べておられますが、「ハキモノを脱いだら、かならず揃える」ことを習慣化することが大切です。よその家をつねた時は「ハキモノを揃える意志」が働きますが、我家ではなかなか出来ません。まず、気が付いた人がハキモノを揃えるように心掛けていけば、少しずつ改善されていくと思います。大事なことは人に云うのではなくて、自らが実行することです。

## 井上昌幸

●いのうえ まさゆき 1940年1月1日生まれ。現在、滋賀県農業種交流連合会会長、STEP21（滋賀県シニアテクニカルエンジニアリングパートナーズ企業組合）専務理事、関西師友協会活字塾講師、大津木鶏クラブ代表世話人、近江素交会代表世話人

〈資格〉ISO14000&9000審査員補

# 日野町で思ったこと

A heart warming story “□□□□□□□”

今関 信子



イラスト：千田 満

日野町へ行きました。日野町は、滋賀県の南東部、鈴鹿山系の西麓に位置する町です。

一般に近江の国出身の商人を「近江商人」といいますが、領主蒲生家の国替えで活気をなくした日野の町から、生活の活路を開くため行商に出た人たちを「日野商人」と呼びます。彼らは、相互扶助と組織による効率アップ、「心算」を修めることによる社会貢献等、独特の考え方で成功を収めたといえます。

町を歩いて驚きました。往時を偲ばせる町並みが、こんなに残っている町を、私は知りません。観光が目的の手が、ほとんど加えられていないのです。だからでしゅうか。町には品がありました。洗い美しさがありました。

私は言いました。

「いいですねえ。」

案内してくれた方が問い返します。

「そうでしゅうか。」

私は間髪入れずに答えました。

「いいですねえ。」



その方は声を落として言いました。

「今、この町は、変化し始めています。」

「えっ、なにが？」

「板塀があって、瓦葺きの家があつながつてゐる町並みですよ。お隣とのお隣と、またまたお隣と、豪商の家も民家も、調和のある雰囲気醸し出しているこの町並みです。まともをもちているこの町が。」

「息に言つて、その方は、息をつきました。めぬきごおりのずっと回つてくへ目をやつて、今度はため息をつきました。

「原因はトイレです。」

「トイレ？」

私には、訳が分かりません。首を傾げる私に、その人は説明してくれました。「このあたりは今、トイレの水洗化が進んでいるのです。工事のために、一軒あたり二百万円くらいかかるそうです。」

「トイレだけに二百万円？」

「驚きますよね。」

私はその人の目をしっかりと見て、頷きました。大きく二度も。

「それで考えるんですよ。この際、家を建て替えてしまおうかつて。古い家は使い勝手の悪いところもあるし……、と。家を新しく建てれば、水洗トイレは当たり前設備だし……。問題あるところはなくなつて、どこからどこまで新しくなるんだし、今度は自分の気に入つた家が建てられるんだから、そのほうがいいかも知れない……、と。」

「まあ、もつたない。この美しい町並みが壊れてしまつたのですか。無くなつてしまつたのですか。」

「そうですね。でも、今、そんなりつとあるのです。」

「何かするのなら、今ですね。今を逃したら、もう二度と……。」

私はあせつて声高になっていました。いぶし銀のような渋い美しさを持つ町に、そんな声は似合いませんでした。私達はそれつきり黙つて、影が長くなつても散策し続けました。



● いまぜきの、がこ11942年東京生まれ。東京保育女子学院卒業後、幼稚園教諭となる。7年間保育者として働いた後、創作活動にはいる。日本児童文学者協会理事。

〈主な著書〉「小犬の裁判はじめます」1987年童心社 青少年読書感想文コンクール課題図書。「さよならの日のねずみ花火」1995年国土社 青少年読書感想文コンクール課題図書、厚生省中央児童福祉審議会推薦文化財。「地雷の村で『寺子屋』つくり」2003年PHP研究所 など多数

M. Senda

● せんた みつる11950年、滋賀県生まれ。大阪のデザイン会社を経て1980年「イラストレーション・スタジオオアビーロード」設立。イラストレーションを中心にポスターやパンフレット等を制作、ロゴマークやパース・キャラクターデザイン等グラフィック全般、広告・エディトリアルを中心に活動中。

## 風呂敷七変化

畑 裕子



イラスト：徳永 拓美

風呂敷を見ると妙な懐かしさが湧いてくる。私の歩んできた断面がぼっかり浮かんできてる。「良い風呂敷はためだよ」と言っただけから渡された薄っぺらいえんじ色の風呂敷。即座に遊び仲間のマントとなり、ひらひら靡かせいつかどの剣士を気取る私。男の子の中に紅一点。女剣士は颯爽と腕白どもに立ち向かうのだった。その遊びに飽きると今度は女の子たちとのままごとが待っている。風呂敷はマントから敷物に早変わり。「子供たち、お母さんはお使いにいらしてきますからおりこうさんしてお留守番するのですよ」年長のお母さん役が去ると、私はたちまちおらしくこちそうを作るはんなりした女のたじ。

その後の風呂敷の記憶といえば来客が手に携えた風呂敷包み。あの中にはどんなお土産が入っているのだろうとさりげなく見つめるさもしい姿ばかりが心に刻まれている。風呂敷が高貴に思えてきたのは大学生になり、万葉集の講義を受けるようになってからだ。ひと昔、ふた昔、そのまた昔、H先生は片手に風呂敷包みを携え教室へ。おもむろに開かれる風呂敷からは年代物の香のする万葉集が顔を覗かせる。十数人の学生の眼は魔法にかかったように古色蒼然とした書物に注がれる。先生は丁寧に風呂敷をたたみ、机の端へ置かれた。私たちの姿勢は自ずと正され、万葉人の世界へ導かれていく。H先生はまさしく風呂敷の君であった。そのような厳肅な時を持ったならば万葉集はお手のものでしょうか、と言われそうだが、残念ながら私の思い出に残っているのは風呂敷が醸し出す不思議な魔力のみである。

風呂敷は「大風呂敷を広げる」とおおげさに言う例えに使われることもあり、ありがたくない言葉も頂いているが、実際、大きな風呂敷は美にたくさん物が包め、実用的なのだ。かつて亡き義母が遠方から我が家を訪れたとき、よく風呂敷包みを前後振り分けにしてやってきた。大きな唐草模様の包みや綿のしっかりした紺の風呂敷包みの中はいつも私たちを喜ばせるものがいっぱい入っていた。義母は風呂敷包みの中から手作りの味噌や野菜、孫たちのための手作りのおじゃみや人形、地方の特産物などを出しながら「ちよっと格好悪いけど、このスタイルが一番桑で物がたくさん入るのだわ」と、照れたように笑った。さすがに年を経てからは義母の風呂敷の振り分け姿はみられなくなったが、今も唐草模様の風呂敷は暇の中に息づいている。あの風呂敷はその後、どうなったのかしら。もしかすると誰も住まなくなった家の引き出しがタンスで眠っているのかも知らない。

ところで、近年、風呂敷が見直されてきているのは大変嬉しい。雑誌や新聞の特集でもそんな記事を見たことがある。しかも、いずれの風呂敷もデザインが現代風にアレンジされ、その包み方も工夫が凝らされている。何度が手順に添って美しい風呂敷の携え方を真似てみたが、不器用な私は使用の段になると早、忘れてしまい、ああでもない、こつでもないと弄っているうちに面倒になり、昔ながらの包み方をしてしまう。が、それでも十分に美しく粋なのだ。

最近、風呂敷をいたただくことがある。縮緬、化繊、素材は様々だが、そのいずれれもが眺めていて飽きない。中には華やかな

王朝女性を染め上げたものもある。一枚、また一枚、タンスの中でロマンの花が咲く。「テーブルクロスにしても素敵でしょ」と自分が製作者のような顔をして知人に進呈することもある。

雑踏を歩いている時、ふと目の前を和服を小粋に着こなして、風呂敷を優雅に携えた女性を見た時など、思わず見惚れて足を止めてしまいそうになる。風呂敷はやはり元祖「大風呂敷」のよつである。美しい夢を見させ、ほのぼのとした気持ちにさせてくれる。

さて、最後の変化の極めつけはなんといってもエゴバックであろつ。小さくたたまれた風呂敷は、いざという時、肝っ玉母さんのようにたくさんの物を受け入れてくれるのだ。

畑裕子

徳永拓美

●はた ゆつこ 1948年京都府生まれ。奈良女子大学文学部国文科卒業、京都で国語教師を勤める。その後、滋賀県に転居。1993年・第5回朝日新人文学賞受賞、1994年・第14回地上文学賞受賞、滋賀県文化奨励賞受賞。主な著書「画・変幻」「近江百人一首を歩く」「椰子の家」「近江戦国の女たち」など。日本ペンクラブ会員。

●とくなが ひろみ 1949年生まれ。日本画を学び、日春展・京展、新興展、滋賀県展に入選を経て挿絵も描く。「いぶきのやさぶらう」(京都新聞社)、「守山の野鳥ガイドブック」(守山市立教育研究所)、「甲賀の向かい話」(サンライズ出版)、「イルカをおそった黒い波」(汐文社)など。レイカディア大学「手作り紙芝居講座」講師。

〈MOH-ECOTOURISM-7〉

# 屋久島 エコアイランドへの道

檀上 俊雄

## 「はるかなる山岳島」

黒潮と対馬海流を分け、まさに海の中央分水嶺にふさわしい屋久島は、台風の通り道であり、ひと月に35日降るとたとえられる多雨と冬の積雪の中で、類いまれな植物の垂直分布は育まれた。奥岳中腹にある縄文杉や、スギ林帯の上に広がるヤクザサ、シヤクナゲ等の亜高山帯の九州最高峰宮之浦岳への登山の醍醐味は他では味わえないものだ。

豊臣秀吉によって多くのヤクスギが伐られたように、この島は古くから山に生きた歴史が積み重なっている。厳しく保護された山の自然ではなく、人が出入りする原生林であった。前岳に登り、宮之浦岳をはじめとする奥岳を遥拝する伝統は今日でも受け継がれている。

近代の小杉谷を前線基地とする林業は長くは続かなかったが、その遺産であるトロッコ道は貴重な登山道として今に活かされている。亜熱帯の海上に浮かぶ周囲100キロの山岳島をして、ユネスコが「自然遺産としての屋久島の価値は、多くの人たちが暮らしていないが、すぐれた自然が残されていることにある。」と指摘する言葉のなかにこの島の個性がみごとに集約されている。

屋久島へ多くの観光客が訪れるようになったのは、世界遺産に登録された1993年以降だが、自然を見直す気運の高まりのなかで、だれもが一度は訪れたい場所という人気ぶりだ。登山の経験のない人が危なっかしいトロッコ道を往復10時間もかけて、そのシンボルである縄文杉を見に行く。国立公園、森林生態系保護地域、原生自然環境保全地域、国指定の天然記念物屋久島スギ原始林のすべてを包含し、島の面積の2割が自然遺産地域として登録されたが、ただただこの樹齢7000年といわれる一本の巨樹をめざして旅行者は列をなし向かうのである。海岸の宿に泊まり、ガジヌマル、アコウ等の亜熱帯植物

をはじめとする照葉樹林帯から、タブ、シイ、カシ等の暖帯、モミ、ヤマグルマ等の温帯を抜けて山岳のスギ林帯へと移動することになるのだが、現実には植物の垂直分布を味わう余裕のある人はごく少数という厳しい行程となる。

この島へのアプローチとしては飛行機、高速船、フェリーがある。洋上から山岳島を眺めるという意味では、フェリーがいい。大型化、高速化が進み、4時間半の船旅は快適だ。船旅と縄文杉への印象深い登山、島の観光が一体となった山旅の愉しみがここにはあるが、少しでも時間を短縮する為に飛行機や高速船の利用が増えているのが現状だ。

### 「世界遺産屋久島の現状」

縄文杉に偏重した観光の実態は、決して好ましいものではない。トロッコ道の整備が進んだことで安全かつ往復の時間短縮がはかられ、これに対応するように縄文杉ガイドが組織化、均質化され、ひとりでも入山が可能となった。こうしてますますこの傾向は強まっている。歩く自信のない人は他のヤクサギを見たり亜熱帯の海岸を楽しんだ

りで、かつては分散していたものだが、だれでも縄文杉へ行けるようになるとこの一極化は当然の帰結かもしれない。

そうしたなかで2007年6月に台風4号がこの島を直撃した。荒川登山口への車道が崩壊し一時全面通行止となった。山慣れた人の登山口である白谷雲水峡への車道も土砂崩れで入山ができない状態となったことで、屋久島観光への打撃は大きいものがあつた。世界遺産屋久島に対応した観光の取り

組みにもかかわらず、現実是一本のヤクサギに依存する現状を改めて島民は思い知ることとなった。

かねてより団体客は大手旅行代理店の行なうツアーへの依存が大きく、個人客においては島内の交通機関が貧弱であることから自由に島内を見てまわることが不可能であり、宿泊施設が送迎できる範囲も限られていることから、縄文杉集中を招いたともいえるだけに、事態は深刻だといわざるを得ない。



登山においても奥岳宮之浦岳に偏重しており、岳参りで知られる前岳へ足を向ける人は限られていて、日本百名山宮之浦岳は必ず登りたい山という存在ではあるものの、季節やコースを変えてまた登ろうというリピーターを作り出すという状態ではなく、現状では登山は観光面で大きく期待できるものではない。

また縄文杉ガイドをはじめ、観光にかかわる人は島外出身者が多いという現実もある。これまでのところ新旧住民のコミュニティは良好だが、島の人を置き去りにしがちなこうした現実、島の人を中核にした地元主体の持続可能な島の暮しを実現するさまざまなげにないかねない。

### 【共生の島の可能性】

かねてから世界遺産区域を通る狭い西部林道を大型観光バスが通れるよう拡幅して島一周観光への道を拓こうという動きがあったが、自然保護の前に中止となった。現状では高い料金のタクシーを利用するかレンタカーで通るしか方法はないが、旅行者が自然を堪能しつつ移動する手段が求められている。

西部林道の出入口にあたる永田や栗生地区から、宿泊とツアーを行なう拠点施設を作ることではできないのだろうか。

島内水力発電ですべてをまかなうエコアイランドへの取り組みが始められているが、これを強力で推進して、人の暮しに隣接してある原生林の垂直分布を持つ世界遺産観光を具体的に体現することで、屋久島にふさわしいエコツーリズムを確立し、縄文杉の一極観光からいち早く脱却することが不可欠となる。こうした考え方によって、縄文杉への林道を使った車での入山から、安房森林鉄道を復元させてこれに移行させる。多くの困難はあるだろうが、実現できれば保護と観光の調和をはかることができるはずだ。世界遺産センターや屋久杉自然館はその沿線に移築し、ヤクスギランドや白谷雲水峡の自然休養林へのアクセスもこれに関連づけて整備すべきだ。奥山のいくつかの登山避難小屋も同様だが、これをすべて有人化、ネットワーク化し、多くの人に自然の素晴らしさを知らせるべく誘客をはかる。入森、入山数を把握し、オーバーユースとならないように登山

客を分散させつつ、安全快適なロッジとして機能させることが求められる。

上屋久町と屋久町は、合併し屋久島となった。観光面では屋久島観光協会が束ねて運営してきたが、環境文化センターを中心に基盤整備を担う鹿児島県、国有林管理の森林管理局、国立公園の環境省、水力発電を行なう屋久島電工などを世界遺産センターがこれまで掌握し、指導の立場をとれるかが大きな課題となっている。そしてツアーをトータルに管理する役割を担う観光協会とどこまで歩調をあわせることができるかが大きな鍵となることはまちがいない。自然保護、ツーリズム、暮らしをあわせた、ほんとうの環境の時代を拓く壮大な試みは大いに注目される。

## 檀上俊雄

● だんじょう としお 1951年広島県尾道市生まれ。立命館大学文学部地理学科卒。山と自然研究会青山舎代表。日本旅のペンクラブ会員。

著書／「比良山・湖西の山」山と溪谷社（共著）

# 本の紹介

最近入手した、  
気になる本を  
ご紹介いたします。

BOOKS

雄猫と、おもいきや  
すて猫だつて



- 著者／福島和人
- 発行所／すばる出版
- 価格／10000円
- 内容／ほんのりとピンクに染まる耳。捨猫は、福猫だった。大切なものはなんだろう

## CSRイニシアチブ

(CSR経営理念・行動憲章・行動基準の推奨モデル、英訳付き)



- 著者／日本経営倫理学会
- CSRイニシアチブ委員会
- 発行所／日本規格協会
- 価格／23000円＋税

● 内容／CSR行動基準などの基本モデルを完全収録！ 推奨するCSR理念を示すとともに、10に区分したステークホルダーごとの具体的な行動憲章・行動基準（フルモデル）を提示。実務担当者への協力的なアシストとなる書。滋賀県では、新江州と平和堂が掲載されている。

## 環境カレンダー2008

- 著者／高月紘
- 発行所／日本環境保護国際交流会
- 価格／9000円(税込み)
- 内容／「ひとのちからでスローライフ」をテーマに現代



見区)で原画展も開かれた。  
京都市伏

あなたの暮らしが  
世界を変える



- 著者／阿部治 著
- 野田研一 監修
- 発行所／山と溪谷社
- 価格／14700円
- 内容／サステナビリティ(持続可能性)がやさしくわかる！ 今、地球で起こっている真実は、ひとつひとつがばらばらに起こっているわけではない。まず知るこ

## 環境がわかる絵本



- 著者／佐伯平一 著
- 長崎訓子 イラスト
- 発行所／山と溪谷社
- 価格／14700円
- 内容／地球の環境を身近な問題からグローバルな問題まで幅広く取り上げ、多くの人に、地球環境の現状を理解したうえで、いま何をなすべきか、どのように行動すべきかを考えていくことを目的とした絵本。

そして身近なところから少しでも意識を改善していくこと。それが一番大切なこと。11のテーマについてわかりやすく解説し、地球の真実と、そのため今できることが知らず知らず、頭の中ですーっと入ってくる。

# 落ち葉

三山 元暎



さし絵：中川 善雄

明治生まれの俳人、瀧井孝作はかつて、「桐桜櫛柿朴庭落葉」と漢字ばかりずらりと並べ、わが家の庭の落葉を羨しむ風情を詠った。それぞれの色をつけた木の葉が、曼陀羅のように散り敷いているその美しさ、自然の妙が心を掴ませるのだろう。落ち葉には紅葉とはまた違った凋落の美がある。

落つる葉の落ちぬ葉に言ふ

そやうなり

穴吹義教

今年もまた、近くの雑木林を歩いた。落ち葉を踏み分け、木立の中を歩くのは気持ちが良いものだ。長年かけて積もった落ち葉の層は柔らかく、それが醸成するにおいと湿気は、とても気分を心地よいものにしてくれる。

夏には豊満な緑の衣をまとっていた木々が、しきりに葉を散らせ薄着となり、空が透けて見える。その枝越しには

伊吹山のどっしりした山容が目に見えび込んでくる。クヌギもコナラもよいな葉を落して身軽になり、冬を迎える態勢を整えている。葉落しは、樹木の大切な循環作用だ。地表は守られ、朽ちて植物の大切な養分になる。目を凝らしてみれば、散り透くコナラの葉のわきにはもう、たくさんの赤い芽がついていた。

秋は落ち葉の季節であるが、やがて姿を現す新しいのちを育む季節でもある。

## 三山 元暎

●みやまもとあき1940年滋賀県坂田郡山東町(現米原市)生まれ。長浜市の理事・経済部長を経て1995年8月から2005年2月まで山東町長。同月14日米原市誕生にともない退任。真宗大谷派真勝寺住職。

●なかがわ よしお1936年生まれ。滋賀県展、長浜市展、伊吹を描く絵画展など入賞、入選歴多数あり。税理士。



## 読者からのお便り

■「体を使って自然と向き合い自然の掟と人間の欲望のかみ合うところを求めて知恵を働かせる」

すごくハイクオリティな冊子ですねえ。感心しました。滋賀の森が枯れてきて心配です。一度見に来てください。

マルト

■今回は3周年記念号ということで、充実し、広範囲な話に触れて尻を叩かれた感じです。今回誕生した福田内閣の閣是は「自立と共生」だとか？自立は生きることが環境への影響を最小限に配慮し、自分を含めたこの世のすべての命の循環を重く受け止める事。共生は生かされている自分を周りに感謝し施す心。何か政治が「MOH」の精神で動くようで、嬉しいかぎりです。

中村 武司

■17号のアトム保育園に研修に行く団体長さんや、京都に人形作りに行っている役員さんがおられました。なんとも、タイミングの良い配布でした。皆さんが注目されているところを記事に取り上げるのはさすがですが、なー、と感心しているところです。

草津市南笠東育成会

西野 博仁

## MOH読者川柳

もったいないと 捨てずにためた

ゴミ袋

中村達平 54歳 長浜市

就活に 身を投じるのも

ほどほどに

中村早希 22歳 長浜市



# やまの「し」事業で 森林体験の巻

作：石ノ井 富

滋賀県では、平成19年  
4月より

「やまの「し」事業」がスタート  
した。この事業は、



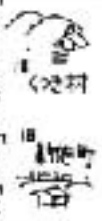
小笠原半島が、うねりに  
びわくの理髪店  
高杉町まで行く  
いかに山を体験する



小学4年生が、山に  
お向かい、本林の勉強  
「やまの「し」事業」  
事業。



県下11の市町村が参加  
がある中、高杉町市では、



「やまの「し」事業」  
とどう参加するかと  
くまの森では、間伐体験  
や、水溜り遊びなど、

山の楽しみを、  
「やまの「し」事業」  
「やまの「し」事業」では、山を  
「やまの「し」事業」  
ものよる。



オノミキは、そうして  
小学4年生の皆さんは、

「やまの「し」事業」  
「やまの「し」事業」  
「やまの「し」事業」



は日にくまの森で  
間伐体験、ビンキの木  
を、倒すのよる。

「やまの「し」事業」  
「やまの「し」事業」  
「やまの「し」事業」



「やまの「し」事業」  
「やまの「し」事業」  
「やまの「し」事業」

「やまの「し」事業」  
「やまの「し」事業」  
「やまの「し」事業」



「やまの「し」事業」  
「やまの「し」事業」  
「やまの「し」事業」



「やまの「し」事業」  
「やまの「し」事業」  
「やまの「し」事業」





# 講演日記

## A lecture diary

皆様のご支援でたくさんの講演依頼を頂きました。7月～10月の講演をダイジェスト版でお知らせします。

- 中小企業と新卒採用  
日時：7月23日(月)  
主催者：滋賀大学経済学部弘中ゼミ
- テーマ：ゼミ生がつくる「新卒採用プラン」
- 場所：新江州eプラザ
- 参加者人数：26名
- 演者：総務部 澤幹夫
- 大阪府中小企業家同友会
- 第7期役員研修講座  
日時：9月8日(土)  
主催者：大阪府中小企業家同友会
- テーマ：国民や地域とともに歩む中小企業
- 場所：クロスW梅田
- 参加者人数：30名

- 演者：森建司
- 経営道フォーラム  
日時：9月19日(水)  
主催者：山城経営研究所
- テーマ：循環型社会を生きる企業経営～近江商人の理念を生かす～
- 場所：椿山荘
- 参加者人数：30名
- 演者：森建司
- 新江州創立60周年記念  
日時：9月29日(土)  
主催者：新江州
- テーマ：歴史とともに振り返る
- 場所：長浜ロイヤルホテル
- 参加者人数：280名
- 演者：森建司
- 秋の夜長を楽しむ夕べ  
日時：9月29日(土)  
主催者：NPO麻生里山センター
- テーマ：森と人とのつ

- ながりく桃太郎に学口ハスな暮らし
- 場所：朽木・やまね館
- 参加者人数：60名
- 演者：飯高 転石（朽木 學道 他）
- KIESS研究会  
2007
- 日時：9月30日(日)
- 主催者：NPO 循環共生システム研究所
- テーマ：持続可能社会を改めて考える
- 場所：ピアザ淡海
- 参加者人数：50名
- 演者：エクハルト・ハーン（ドルトムント大学） 他
- MOH通信執筆者懇談会  
日時：10月11日(木)  
主催者：MOH通信
- テーマ：18号19号検討
- 場所：京都がっこ
- 参加者人数：13名
- タウンミーティング  
高槻

- 日時：10月13日(土)
- 主催者：たかつき環境市民会議 温暖化防止G
- テーマ：暮らしやすい地球を子どもたちへ
- 場所：高槻現代劇場
- 参加者人数：100名
- 演者：石井 吉徳 他
- サステイナブル経営戦略会議発起  
日時：10月23日(火)
- 主催者：サステイナブル経営戦略会議
- テーマ：持続可能社会の経営は中小企業の独壇場
- 場所：北びわこグラッチェ
- 参加者人数：20名
- 演者：森建司
- エコビジネストリップ  
日時：10月25日(木)
- 主催者：びわ湖環境ビジネスメッセ2007
- テーマ：エネルギーパークと持続可能型経営
- 場所：新江州eプラザ
- 参加者人数：20名

- 演者：森建司
- 環境の取組み見学  
日時：10月25日(木)
- 主催者：大垣市環境市民会議 事業者部会
- テーマ：エネルギーパークと持続可能型経営
- 場所：新江州eプラザ
- 参加者人数：9名
- 演者：森建司
- 地球環境関西(株)フォーラムセミナー  
日時：10月25日(木)
- 主催者：地球環境関西フォーラム
- テーマ：持続可能社会の実現に向けた生物多様性保全について考える
- 場所：長浜ハイオ大学
- 参加者人数：100名
- 演者：白井 義人（九州工業大学） 他
- 滋賀県エルピーガス協会研修会  
日時：10月26日(木)
- 主催者：滋賀県エル

ピーガス 協会

● テーマ:エネルギーピークと持続可能型経営

● 場所:グランパレ東京

● 参加者人数:50名

● 岩

● 演者:森建司

● 参加者人数:50名

● 演者:森建司

● 社会人講師

● 日時:10月30日(火)

● 主催者:滋滋賀県立八幡商業高校

● テーマ:ビジネス活動と環境保全

● 場所:八幡商業高校

● 参加者人数:41名

● 演者:森建司

● 京都工業会11月例会

● 日時:11月7日(水)

● 主催者:京都伏見工業会

● テーマ:戦おう!熱

● 思いの経営者たち!

● 場所:食事苑京阪

● 参加者人数:40名

● 演者:森建司

# M.O.H ニュース

MOH news

● 地域再生担うリーダー誕生、県立大の「近江環人」1期生8人検定に合格(10/9~16)朝日、読売、滋賀夕刊

● 学校林の木材で共用体育館建設、朽木東小・朽木中(9/8~29)朝日、読売、京都

● 路面電車「79都市で採算とれる」LRT普及めざし討議9月22日同志社大学で全国大会(9/4)

● 今出川通りにLRT実現へ沿線団体が推進の会 大学など来月設立(10/9)

● 農の水脈、変容を迫る基本計画II宮本常一葉、無名の農民の知恵を聞き書きし、民具や田植歌をこよなく愛した。今も生きていたら、農の水脈が絶たれそうな現状をどう思ったらう。リレーコラム近江抜粋(9/4)

● 資金・後継者難越え1世紀、湖国で最古木之本の江北図書館(10/9)

● バイオ燃料発車、大阪でGS2店廃木材を利用(10/10)

● 全国100カ所に自転車道 国交省と警察庁事故続発防止へ自治体に財政支援(10/11)

● 竹チップで抑草に効果、景観美しく除草労力軽減「間伐」有効活用 湖東振興局彦根の道路植樹帯で実験(10/12)

● 近江八幡市教委通学区域を弾力化 来年度から3年間試行 沖島小は市内全域(10/16)

● 「近江学」来春スタート、成安造形大研究所を設立II食文化、埋蔵文化財、漁法など掘り下げ

● 架線なしOK新路面電車、札幌市走行試験前に公開

● 中国魚「エンツイ」初確認、琵琶湖観賞用を放流か(11/6)京都

● 九州折尾駅・築90年木造2階建ての駅舎保存へ市民が署名活動(10/16)コムケア

● 野生動物食害防除活動開始、防護柵設置・ポリネット防除など(11/22)かもしかの会

## 「循環型社会を目指す～M・O・H通信～」の発行に当たって

代表 森 建司

20世紀型社会は経済至上主義の時代であった。科学技術の進歩とそれに伴う工業や流通の発展は、世界的なスケールで人々に物による恩恵をもたらしたが、同時にバランスのとれた自然との共生社会を破壊した。経済至上主義とは物の豊かさを最高の幸せとして捉え、その対極にあるものの価値をほとんど消し去ろうとするものである。人々の価値観を情報操作で画一化して、特定のものに集中させようとするマーケット戦略は個人の人生観、社会観にまで侵入し、その独自性、不可侵性まで奪って行った。このことによって人々は哲学的な意味の自己をなくしてしまった。

今こそ新しい時代として循環型社会を作ろうとしているわれわれは、自己を証明する、こころとか思いを取り戻さなければならない。死生観とか人生観、先祖とか子孫、生涯をかける志、自己を自己らしく生き抜くための人生哲学など。そしてそれは自然との共生社会を目指すものであり、人としての真の生き様を問うものであらねばならない。

この実現のために

「循環型社会を目指す～MOH通信～」を発行する。

## 《 MOH通信概要 》

### ■目的

- (1) 循環型社会構築に向けた意識改革
- (2) 浪費型社会通念の脱却
- (3) 人生哲学を学ぶ

### ■事業

- (1) 通信の発行及び出版
- (2) 講演会、勉強会、シンポジウムなどイベントの開催

### ■会費

- (1) 通信購読料 年間3,000円
- (2) 入場料徴収 随時
- (3) その他

### ■事務局

〒526-0111 滋賀県長浜市  
川道町759-3

循環型社会システム研究所

TEL.0749-72-5277

FAX.0749-72-8681

e-mail:tsujimura@shingoshu.co.jp

代表:森 建司

担当:辻村 琴美



「M・O・H」のマーク＝牛

牛は環境の象徴ともいえます。牛糞はメタンガスになり、肥料にもなります。大地を作り、食物を育て、生物を養います。私たちは命の源ともいえる、牛を「MOH」のマークとし、循環型社会の象徴とします。

## ★MOH通信の役割★

持続可能で豊かな循環型社会を築く社会人の意識を向上するためMOH通信は情報を発信し交流を続けます

M	→もったいない	循環	他の生命を奪って得たものを使わせて頂く
O	→おかげさま	共生	人は一人では生きられない、環境によって生かされている
H	→ほどほどに	抑制	欲はほどほどに、良き環境を作り上げるために

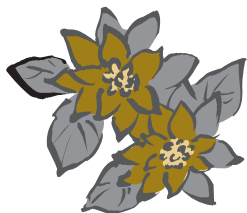
## お知らせ

### 「びわ湖プロジェクト フォーラム」森が動く

- 主催／滋賀地方自治研究センターびわ湖プロジェクト
- 協力／MOH通信
- 日時／12月9日(日) 13:30～16:30
- 場所／東近江市愛東公民館文化センター
- 参加費／500円
- プログラム／びわ湖プロジェクト紹介
- 基調講演：森と企業をつなぐ「森の町内会」半谷 栄寿氏
- リレートーク、近江の森健康診断「キキダス」キックオフ宣言

### 「MOH通信執筆者懇談会10」

- 主催／MOH通信
- 日時／12月17日(月) 17:00～19:30
- 場所／滋賀県草津市・梅の花(エストピア)
- 参加費／3000円
- テーマ／それぞれの活動報告
- 締切／12月13日
- 申し込み／074917215277 辻村まで



## 《次号予告》

2008年2月発行予定

### ■特集:循環型社会の地域づくり

- 対談／滋賀県立大学 曾我 直弘 学長+森代表
  - 演習／滋賀県立大学生が創る「未来の社会・新桃太郎物語」
  - インタビュー／森と企業をつなぐ「森の町内会」事務局代表 半谷 栄寿氏
  - レポート／びわ湖プロジェクトフォーラム「森が動く」
  - 連載／通常通り
- ※ 予告なく変更いたします

## 編集後記

editing voice

- ★MOH通信も4年目に突入しました。皆様の応援のおかげです。深く感謝いたします。
- ★九州を特集しました。「所変われば品変わる」と、いいですが「井の中の蛙」になってはイカン!と気づきました。そして「初志貫徹」の大切さを学びました。純粋で素朴でバイタリテイのある九州、大好きになりました。
- ★地元を飛び出して、MOHの動きを取材します。お楽しみに。

# 《M・O・H通信》購読受付中!

あなたも「M・O・H通信」を購読しませんか。特典として、M・O・H通信、講演会のご案内をいたします。活動やこの通信についての、ご意見もお聞かせください。

電話番号、fax(あれば)、e-mailアドレス(あれば)、あなたの心に残った一言をご記入の上、お申し込みください。通信をお送りします。申込書をfax、郵送、mailでお送りください。

あなたのお名前、年齢、郵便番号、住所、電

## 《M・O・H通信》購読申込書

フリガナ		年齢	希望口数
お名前			1口=3,000円
住所	〒		
電話	FAX	メールアドレス	
あなたの心に残った一言、MOH川柳をお書きください。			

※記入いただいた内容については、目的以外のことに使用または転用はいたしません。

キリトリ線

## M・O・H通信 Vol.18(通巻19号) 2007年11月末日発行 発行部数5,000部

### ●編集・発行/新江州(株) 循環型社会システム研究所 M・O・H通信編集局

代表 森 建司  
編集長 つじむら ことみ  
編集協力 稲垣 重雄

村山 明子  
寺川 智美  
東良 真紀  
取材 細井 美保

辻村 敏之  
デザイン 伊達デザイン室  
写真 辻村写真事務所

平田 尚加  
藤田 和男  
印刷 新江州(株)情報C  
ブログ 松崎 和弘

### ●ご協力

滋賀県  
琵琶湖環境科学研究センター  
(社)滋賀県社会福祉協議会  
高島市

#### [執筆者懇談会]

内藤 正明  
海東 英和  
下西 康嗣  
末永 國紀  
花田 真理子  
弘中 史子  
今関 信子  
山崎 隆  
三山 元暎  
加藤 みゆき  
檀上 俊雄

山口 美知子  
堤 幸一  
進 ひろこ  
中村 誠  
笹山 千伶  
奥山 武生  
結城 美枝子  
松崎 和弘  
井上 昌幸  
辻村 耕司  
佐々木 洋一  
(順不同、敬称略)

### ●支援 新江州(株)

〒526-0111  
滋賀県長浜市川道759-3  
TEL.0749-72-5277  
FAX.0749-72-8681

★ブログ 滋賀・咲くブログ★  
<http://moh.shiga-saku.net/>

★ホームページ★  
<http://moh.moh.jp>

#### [購読費振込先]

M・O・Hの会 代表 森 建司

- 滋賀銀行 長浜支店 普通 136987  
(モウノカイ ダイヒョウ モリケンジ)
- 長浜信用金庫 本店 普通 0577468  
(モウノカイ ダイヒョウ モリケンジ)
- びわこ銀行 長浜支店 普通 721691  
(モウノカイ ダイヒョウ モリケンジ)

※記事中の写真・本文につきましては、無断転載を禁じます。